

虚構の春

太宰治

師走上旬

月日。

「拝復。お言いつけの原稿用紙五百枚、御入手の趣おもむき、小生も安心いたしました。毎度の御引立、あり難く御礼申しあげます。しかも、このたびの御手簡には、小生ごときにまで誠実懇切の御忠告、あまり文壇通をふりまわさぬよう、との御言葉。何だか、どしんとたたきのめされた気持で、その日は自転車をのり廻しながら一日中考えさせられました。というのは、実を言えば貴下と吉田さんにはそういった苦言をいつの日か聞

かされるのではないかと、かねて予感といった風のものがあつて、この痛いところをざくり突かれた形だったからです。然し、しか、そう言いながらも御手紙は、うれしく拝見いたしました。そうして貴下の御心配下さる事柄に対して、小生としても既に訂正しつつあるということを御報告したいのです。それは前陳の、予感があつたという、それだけでも、うなずいて頂けると思っています。何はしかれ、御手紙をうれしく拝見したことをもう一度申し上げて万事は御察し願うと共に貴下をして、小生を目してきらいではない程のことでは済まされぬ、本当に好きだといって貰もらうように心掛けるこ

とにいたします。吉田さんへも宜しく御伝え下され度、小生と逢^あつても小生が照れぬよう無言のうちには有無相通ずるものあるよう御取はからい置き下され度、右御願ひ申しあげます。なお、この事、既に貴下のお耳に這入^{はい}つているかも知れませんが、英雄文学社の秋田さんのおつしやる場所に依^よれば、先々月の所謂^{いわゆる}新人四名の作品のうち、貴下のが一番評判がよかつたので、またこの次に依頼することになつていふ話です。私は商人のくせに、ひとに対して非常に好き、きらいがあつて、すきな人のよい身のうえ話は自分のことのようにうれしいのです。私は貴下が好きなので、

如上じょじょうの自分の喜びを頌わかつ意味と、若もし秋田さんの話が貴下に初耳ならば、御仕事をなさる上にこの御知らせが幾分なりとも御役に立つのではないかと実はこの手紙を書きました。そうして、貴下の潔癖が私のこのやりかたを又怒られるのではないかとも一応は考えてみました。私の気持ちに純粋である以上、若しこれを怒るならばそれは怒る方が間違いだと考えて敢あえてこの御知らせをする次第です。但し貴下に考慮に入れて貰もらいたいのは、私のきらいな人というのは、私の店の原稿用紙をちつとも買かってくれない人を指して居るのではなく、文壇に在あって芸術家でもなんでもない心

の持主を意味して居ります。 尠すくなくともこの間に少しも功利的の考えを加えて居らぬことです。せめてこのことだけでも貴下にかつて貰いたいものです。——まだ、まだ、言いたいことがあるのですけれども、私の不文が貴下をして誤解させるのを恐れるのと、明日又かせがなければならぬ身の時間の都合で、今はこれをやめて雨天休業の時にでもゆっくり言わせて貰います。なお、秋田さんの話は深沼家から聞きました、貴下にこの手紙書いたことが知れて、いらぬ饒舌じょうぜつしたように思われては心外であるのみならず、秋田さんに対しても一寸ちよつと責任を感じますので、貴下だけの御含みに

して置いて頂きたいと思ひます。然し私は話の次手ついでにお得意先の二、三の作家へ、ただまんぜんと、太宰さんのが一ばん評判がよかつたのださうです。ね位のことはいうかも分りません。そうして、かかることについても、作家の人物げったん月旦やめよ、という貴下しつせいの御叱正の内意がよく分るのですけれども私には言ひぶんがあるのです。まだ、まだ、言ひたいことがあると申し上げる所以ゆえんなのです。いずれ書きます。どうぞからだを大事にして下さい。不文、意をつくしませぬが、御判読下さいまし。十一月二十八日深夜二時。十五歳八歳当歳の寢息を左右に聞きながら蒲団の中、腹這いのまま

の無礼を謝しつつ。田所美德^{よしのり}。太宰治様。」

「拝啓。歴史文学所載の貴文愉快に拝読いたしました。上田など小生一高時代からの友人ですが、人間的に実にイヤな奴です。而るに吉田潔^{しか}なるものが何か十一月号で上田などの肩を持ってぶすぶすいつてるようですが、若し宜しいようでしたら、匿名^{とくめい}でも結構ですから、何かアレについて一言御書き下さる訳には参りませんか。十二月号を今編輯^{へんしゅう}していただきますので、一両日中に頂きますと何よりです。どうか御聞きとどけ下さいますよう御願ひ申します。十一月二十九日。栗飯原 悟郎。太宰治様。ヒミツ絶対に厳守いたします。本名

で御書き下さらば尚うれしく存じます。」

「拝復。めくら草子の校正たしかにいただきました。御配慮恐入ります。只今校了をひかえ、何かといそがしくしております。いづれ。匆々。そうそう相馬閨二。」

月日。

「近頃、君は、妙に威張るようになったな。恥かしいと思えよ。(一行あき。)いまさら他の連中なんかと比較しなさんな。お池の岩の上の亀の首みたいなどころがあるぞ。(一行あき。)稿料はいつたら知らせてくれ。どうやら、君より、俺おれの方が楽しみにしているようだ。

(一行あき。)たかだか短篇二つや三つの註文で、もう、天下の太宰治じゃあちよいと心細いね。君は有名でない人間の嬉しさを味わわないで済んでしまったんだね。吉田潔。太宰治へ。ダヌンチ才は十三年間黙つて湖畔で暮っていた。美しいことだね。」

「何かの本で、君のことを批評した言葉のなかに、傲慢の芸術云々という個所があつた。評者は君の芸術が、それを失くした時、一層面白い云々、と述べていた。ぼくは、この意見に反対だ。ぼくには、太宰治が泣き虫に見えてならぬ。ぼくが太宰治を愛する所以でもあります。暴言ならば多謝。この泣き虫は、しかし、

岩のようだ。飛沫ひまつを浴びて、齒を食いしばっている——
—。ずいぶん、逢わないな。—— He is not what he
was. か。世田谷、林彪太郎。太宰治様。」

月日。

「貴兄の短篇集のほうは、年内に、少しでも、校正刷
お目にかけることができるだろうと存じます。貴兄の
御厚意身に沁しみて感佩かんぱいしています。或あるいは御厚意裏切
ること無いかと案じています。では、取急ぎ要用のみ。
前略、後略のまま。大森書房内、高折茂。太宰学兄。」
「僕はこの頃りよくう緑雨の本をよんでいます。この間うちは

文部省出版の明治天皇御集をよんでいました。僕は日本民族の中で一ばん血統の純粋な作品を一度よみたく存じとりあえず歴代の皇室の方々の作品をよみました。その結果、明治以降の大学の俗学たちの日本芸術の血統上の意見の悉皆しっかいを否定すべき見解にたどりつきつつあります。君はいつも筆の先を尖とがらせてものかくでしよう。僕は君に初めて送る手紙のために筆の先をハサミで切りました。もちろんこのハサミは検閲官のハサミではありません。その上、君はダス・マンということを知っているでしょう。デル・マンではありません。だから僕は君の作品に於おいて作品からマンの加減乗除を

考えません。自信を持つということは空中楼阁ちゆうくわかくを築く
如く愉快ではありませんか。ただそのために君は筆の
先をとき僕はハサミを使い、そのときいささかの滞とど
りもなく、僕も人を理解したと称します。法隆寺の塔
を築いた大工はかこいをとり払う日までこんりゆう建立の可能
性を確信できなかつたそうです。それでいてこれは凡おほ
そ自信とは無関係と考えます。のみならず、彼は建立
が完成されても、困をとり払うとともに塔が倒れても、
やはり発狂したそうです。こういう芸術体験上の人工
の極致を知っているのは、おそらく君でしょう。それ
ゆえ、あなたは表情さえ表現しようとする、当節誇る

べき唯一のことと愚^{ぐあん}按いたします。あなたが御病気に
もかかわらず酒をのみ煙草を吸っていると聞きました。
それでああなたは朝や夕べに手洗をつかうことも誇るが
いいでしょう。そういう精神が涵^{かん}養^{よう}されなかつたため
に未だに日本新文学が傑作を生んでいない。あなたは
もつと誇りを高く高くするがいい。永野喜美代。太宰
治君。」

「わずかな興^{きよう}を覚えた時にも、彼はそれを確める為^{ため}
に大声を発して笑つてみた。ささやかな思い出一滴
の涙が眼がしらに浮ぶときにも、彼はここぞと鏡の前
に飛んでゆき、自らの悲歎に暮れたる侘^{わび}しき姿を、ほ

ればれと眺めた。取るに足らぬ女性の嫉妬から、些かの掠り傷を受けても、彼は怨みの刃を受けたように得意になり、たかだか二万法の借金にも、彼は、(百万法の負債に苛責まれる天才の運命は悲惨なる哉。)などと傲語してみる。彼は偉大なのらくら者、悒鬱な野心家、華美な薄倖児である。彼を絶えず照した怠惰の青い太陽は、天が彼に賦与した才能の半ばを蒸発させ、蚕食した。巴里、若しくは日本高円寺の恐るべき生活の中に往々見出し得るこの種の『半偉人』の中でも、サミュエルは特に『失敗せる傑作』を書く男であった。彼は彼の制作よりも寧ろ彼の為人の裡に詩を輝

かす病的、空想的の人物であつた。未だ見ぬ太宰よ。ぶしつけ、ごめん下さい。どうやら君は、早合点をしたようだ。君は、ボオドレエルを擱むつもりで、ボ氏の作品中の人物を、両眼充血させて追いかけていた様だ。我は花にして花作り、我は傷にして刃、打つ掌にして打たるる頬、四肢にして拷問車、死刑囚にして死刑執行人。それでは、かなわぬ。むべなるかな、君を、作中人物的作家よと称して、扇のかけ、ひそかに苦笑をかわすそうしやう宗匠作家このごろ更に数をましている有様。しっかりたのみましたよ、だあさん。ほほ、ほほほ。ごぞんじより。笑つちやいかん！ 僕は金森重四郎と

いう三十五歳の男だ。妻もいることだし、ばかにするな。いったい、どうしたというのだ。ばか。」

「拜啓。益々御健勝の段慶賀の至りに存じます。さて今回本紙に左の題材にて貴下の御寄稿をお願い致したく御多忙中恐縮ながら左記条項お含みの上何卒御承引のほどお願い申し上げます。一、締切は十二月十五日。

一、分量は、四百字詰原稿十枚。一、題材は、春の幽霊について、コント。寸志、一枚八円にて何卒。不馴れの者ゆえ、失礼の段多かるべしと存じられ候が、
只管御寛恕御承引のほどお願い申し上げます。師走九日。

『大阪サロン』編集部、高橋安二郎。なお、挿絵のサン

プルとして、三画伯の花鳥図同封、御撰定のうえ、大
体の図柄御指示下されば、幸甚に存上候。」

月日。

「前略。ゆるし玉たまえ。新聞きり抜き、お送りいたしま
す。なぜ、こんなものを、切り抜いて置いたのか、私
自身にも判明せず。今夜、フランス製、百にちかい
あわがえる青蛙あそんでいる模様の、紅とみどりの絹笠かぶせ
た電気スタンドを、十二円すこしで買いました。書斎
の机上に飾り、ひさしぶりの読書したくなって、机の
まえに正坐し、まず机の引き出しを整理し、さいころ

が出て来たので、二、三度、いや、正確に三度、机のうえでころがして見て、それから、片方に白いふきふさの羽毛を附したる竹製の耳搔みみかきを見つけて、耳穴を掃除し、二十種にあまるジャズ・ソングの歌詞をしるせる豆手帳のペエジをめくり、小声で歌い、歌いおわつて、引き出しの隅すみ、一粒の南京豆ナンキンまめをぼんと口の中にほうり込む。かなしい男なのです。そのとき、出て来たものは、この同封の切り抜きです。何か、お役に立ち得るような気がいたします。私は、白髪あなたの貴方を見てから死にたい。ことしの秋、私はあなたの小説をよみました。へんな話ですけれども、私は、友人のところ

であの小説を読んで、それから酒を呑んで、そのうちに、おう、おう、大声を放って泣いて、途中も大声で泣きながら家へかえって、ふとんを頭からかぶって寝て、ぐっすりと眠りました。朝起きたときには、全部忘却して居りましたが、今夜、この切り抜きがまた貴方を思い出させました。理由は、私にも、よく呑みこめませぬが、とにかくお送り申します。——『慢性モヒ中毒。無苦痛根本療法、発明完成。主効、慢性阿片、あへんモルヒネ、パビナル、パントポン、ナルコポン、スコポラミン、コカイン、ヘロイン、パンオピン、アダリン等中毒。白石国太郎先生創製、ネオ・ボンタージ

ン。文献無代贈呈。』——『寄席芝居の背景は、約十枚
でこと足りります。野面のづら。塀外。海岸。川端。山中。宮
前。貧家。座敷。洋館などで、これがどの狂言にでも
使われます。だから床の間の掛物は年が年中朝日と鶴
警察、病院、事務所、応接室などは洋館の背景一つで
間に合いますし、また、云々。』——『チャプリン氏を
総裁に創立された馬鹿笑いクラブ。左記の三十種の事
物について語れば、即時除名のこと。四十歳。五十歳。
六十歳。白髪。老妻。借錢。仕事。子息令嬢の思想。
満洲国。その他。』——あとの二つは、講談社の本の広
告です。近日、短篇集お出しの由、この広告文を盗み

なさい。お読み下さい。ね。うまいもんでしょう？
（何を言つてやがる。はじめから何も聞いてやしな
い。）私に油断してはいけません。私は貴方の右足の
小指の、黒い片端かたはづめ爪さえ知つて居るのですよ。この五
葉の切りぬきを、貴方は、こつそり赤い文箱に仕舞い
込みました。どうです。いやいや、無理して破つては
いけません。私を知つていますか？ 知る筈はずは、ない。
私は二十九歳の医者です。ネオ・ボンタージンの発明
者、しかも永遠の文学青年、白石国太郎先生でありま
すぞ。（われながら、ちつともおかしくない。笑わせ
るのは、むずかしいものですね。）白石国太郎は冗談で

すが、いつでもおいで下さい。私は、ばかのように見えながら、実社会においては、なかなかのやり手なんだそうです。お手紙くだされば、私の力で出来る範囲内でベストをつくします。貴方は、もつともつと才能を誇つてよろし。芝区赤羽町一番地、白石生。太宰治大先生。或る種の実感を以^もつて、『大先生』と一点不自然でなく、お呼びできます。大先生とは、むかしは、ばかの異名だったそうですが、いまは、そんなことがない様で、何よりと愚考いたします。」

「治兄。兄の評判大いによろしい。そこで何か随筆を書くよう学芸のものに頼んだところ大乘氣で却^{かえ}つて向

うからは是非書かしてくれということだ。新人の立場から、といったようなものがない由。七、八枚。二日か三日にわけて掲載。アプトデートのテエマで書いてくれ。期日は、明後日正午まで。稿料一枚、二円五十銭。よきもの書け。ちかいうちに遊びに行く。材料あげるから、政治小説かいてみないか。君には、まだ無理かな？ 東京日日新聞社政治部、小泉邦録。」

「謹啓。一面識ナキ小生ヨリノ失礼ナル手紙御読了くだされたくせうろう被下度候。小生、日本人ノウチデ、宗教家トシテハ内村鑑三氏、芸術家トシテハ岡倉天心氏、教育家トシテハ井上哲次郎氏、以上三氏ノ他ノ文章ハ、文章ニ似

テ文章ニアラザルモノトシテ、モツバラ洋書ニ親シミ
ツツアルモ、最近、貴殿ノ文章発見シ、世界ニ類ナキ
銀鱗ぎんりん躍動、マコト二間一髪、アヤウク、ハカナキ、高
尚ノ美ヲ蔵シ居ルコト観破つかまつ仕り、以来貴作ヲ愛読シ
居ル者ニテ、最近、貴殿著作集『晩年』トヤラム出版
ノオモムキ聞キ及ビ候ガ御面倒ナガラ発行所ト如何いかナ
ル御作、集録致サレ候ヤ、マタ、貴殿ノ諸作ニ対スル
御自身ノ感懐ヲモ御モラシ被下度伏シテ願上候。御返
信ネガイタク、参銭切手、二枚。葉書、一枚。同封仕
り候。封書、葉書、御意ノ召スガママニ御染筆ネガイ
上候。ナオマタ、切手、モシクハ葉書、御不用ノ際ハ

ソノママ御返送ノホド才願イ申上候。太宰治殿。清瀬次春。二伸。当地ハ成田山新勝寺オヨビ三里塚ノ近く二候エバ当地ニ御光来ノ節ハ御案内仕ル可ク候。」

月日。

「俺たち友人にだけでも、けちなポオズをよしたら、なにか、損をするのかね。ちよつと、日本中に類のない愚劣頑迷がんめいの御手簡、ただいま覗のぞいてみました。太宰！ なんだ。『許す。』とは、なんだ。馬鹿！ ふん、と鼻で笑つて両手にまるめて窓から投げたら、桐きりの枝に引かかったつけ。俺は、君よりも優越している人間

だし、君は君もいうように『ひかれ者の小唄』で生きているのだし、僕はもつと正しい欲求で生きている。君の文学とかいうものが、どんなに巧妙なものだか知らないが、タカが知れているではないか。君の文学は、猿面冠者のお道化に過ぎんではないか。僕は、いつも思っていることだ。君は、せいぜい一人の貴族に過ぎない。けれども、僕は王者を自ら意識しているのだ。僕は自分より位の低いものから、訳のわからない手紙を貰ったくらいにしか感じなかった。僕は自分の感情を偽いつわって書いてはいない。よく読んで見給え。僕の位は天位なのだ。君のは人爵じんしやくに過ぎぬ。許す、なん

て芝居の台詞せりふがかった言葉は、君みたいの人は、僕に向って使えないのだよ。君は、君の身のほどについて、話にならないほどの誤算をしている。ただ、君は年齢も若いのだし、まだ解らぬことが沢山あるのだし、僕にもそういう時代があつたのだから黙っていただけの話だ。君のこのたびの手紙の文章については、いろいろ解釈してみたが、『こんどだけ』という君の誇張された思い上りは許し難い。きつぱりと黙殺することに腹を決めたのだが、恰度ちようど今日仕事の机にむかつて坐つた時ふと、返事でも書いてみるかという気になってこれを書いた。じたい、二十歳台の若者と酒汲みかわすなん

て厭なものだと思つていたのだ。君は二十九歳十月月
くらいのところだね。芸者ひとり招よべない。碁ひとつ
打てん。つけられた槍やりだ。いつでもお相手するが、し
かし、君は、佐藤春夫ほどのこともない。僕は、あの
男のためには春夫論を書いた。けれども、君に対して
は、常に僕の姿を出して語らなければ場面にならない
のだ。君は、長沢伝六と同じように——むろん、あれ
ほどひどくはないが、けれども、やっぱり僕の価値を
知らない。君は、僕の『つぼ』をうったことは曾かつて
ないのだ。倉田百三か、山本有三かね。『宗教』といわ
れて、その程度のことしか思い浮ばんのかね。僕は、

君のダス・ゲマイネを見たと思ったよ。けれども別に僕は怒りもしなかった。すると、なんだい、『ゆるす』つていうのは。僕は、君が『許して呉れ。』というのをそう表現したのかとさえ思ったほどである。それから、ずっと後でなにか道を歩いていた時、ははあと漸ようやく多少思ったこともある。けれども、それは僕が次第にほんとの姿を現わし始めたことに過ぎないのだ。あの夜は、この温情家たる僕に、ひとつの明確な酷点を教示した。君のゆるせなかったもの、それは僕の酷点のひとつに相違ない。『われ、太陽の如く生きん。』僕の足もとに膝ひざまずいて、君が許せないと感じたものを白

状して御覽。君は、そういう場合、まるで非芸術のよう
に頑固がんこで、理由なしに、ただ、左を右と言ったもの
だが、温良に正直にすべてを語つて御覽。誰も聞いて
いないのだよ。一生に最初の一度。嘘でも、また、ひ
かれ者の小唄でもないもの。まともなことを正直に僕
に訴えて見給え。君は、なにか錯覚おに墜ちている。僕
を、太陽のように利用し給え。この手紙を正当に最後
のものにするかも知れぬ。僕は頑固者は嫌いである。
それは黙殺にしか値しない。それは田舎者いなかもものだ。『君は
何を許し難かつたのか。』恥かしがらずに僕に話して
見給え。はじらいを。君は、僕に惚ほれているのだ。ど

うかね。ゆるすなんて、美しい寡婦かふのようなことを言
いなさんな。僕は、君が僕に献身的に奉仕しなければ
もう船橋の大本教に行かぬつもりだ。僕たち、二三の
友人、つね日頃、どんなに君につくして居るか。どれ
だけこらえてゆずってやって居るか。どれだけ苦しい
お金を使って居るか。きょうの君には、それら実相を
知らせてあげたい。知つたとたんには、君は、裏の線路
に飛び込むだろう。さなくば僕の泥足に涙ながして
接吻せつぶんする。君にして、なおも一片の誠実を具有してい
たなら！ 吉田潔。」

中旬

月日。

「拝呈。過刻は失礼。『道化の華』はな早速一読甚はなはだおも
しらく存じ候。そうろう無論及第点をつけ申し候。『なにひ
とつ真実を言わぬ。けれども、しばらく聞いているう
ちには思わぬ拾いものをする』がある。彼等の気
取った言葉のなかに、ときどきびつくりするほど素直
なひびきの感ぜられることがある。』という篇中のキ
イノートをなす一節がそのままうつつして以てもつこの一篇
の評語とすることが出来ると思います。ほのかにもあ

われなる真実の蛍光を発するを喜びます。恐らく真実
というものは、こういう風にしか語れないものでしよ
うからね。病床の作者の自愛を祈るあまり慵齋主人^{ようさいしゅじん}、
特に一書を呈す。何とぞおとりつき下さい。十日深夜、
否、十一日朝、午前二時頃なるべし。深沼太郎。吉田
潔様硯北^{けんぼく}。」

「どうだい。これなら信用するだろう。いま大わらわ
でお礼状を書いている始末だ。太陽の裏には月ありで、
君からもお礼状を出して置いて下さい。吉田潔。幸福
な病人へ。」

「謹啓。御多忙中を大変恐縮に存じますが、本紙新年

号文芸面のために左の玉稿たまわりたく、よろしくお願いいたします。一、先輩への手紙。二、三枚半。三、一枚二円余。四、今月十五日。なお御面倒でしょうが、同封のハガキで御都合折り返しお知らせ下さいますようお願いいたします。東京市麴^{こうじ}町区内幸町武蔵野新聞社文芸部、長沢伝六。太宰治様侍史。」

月日。

「おハガキありがとうございます。元旦号には是非お願いいたします。おひまがありましたら十枚以上を書いていただきます。ききたい。（一行あき。）小泉君と先般逢^あったが、相変ら

ず元気、あの男の野性的親愛は、実に暖くて良い。あの男をもつと偉くしたい。(一行あき。)私は明日からしばらく西津軽、北津軽両郡の凶作地を歩きます。今年の青森県農村のさまは全く悲惨そのもの。とても、まともには見られない生活が行列をなし、群落をなし、て存在している。(一行あき。)貴兄のお兄上は、県会の花。昨今ますます青森県の重要人物らしい貫禄かんろくを具そなえて来ました。なかなか立派です。人の応待など出来て来ました。あのまま伸びたら、良い人物になり社会的の働きに於いても、すぐれたる力量を示すのも遠い将来ではございますまい。二十五歳で町長、重役頭取。

二十九歳で県会議員。男ぶりといい、頭脳といい、それに大へんの勉強家。愚弟太宰治氏、なかなか、つらからと御推察申しあげます。ほんとに。三日深夜。粉雪さらさら。北奥新報社整理部、辻田吉太郎。アザミの花をお好きな太宰君。」

「太宰先生。一大事。きょう学校からのかえりみち、本屋へ立ち寄り、一時間くらい立読していたが、心細いことになっているのだよ。講談倶楽部クラブの新年附録、全国長者番附を見たが、僕の家も、君の家も、きれいに姿を消して居る。いやだね。君の家が、百五十万、僕のが百十万。去年までは確かにその辺だった。毎年、

僕は、あれを覗^{のぞ}いて、親爺が金ない金ない、と言つても安心していたのだが、こんどだけは、本当らしいぞ。対策を考究しようじゃないか。こまった。こまった。清水忠治。太宰先生、か。」

月日。

「冠省。へんな話ですが、お金が必要なんじゃないですか？ 二百八十円を限度として、東京朝日新聞よろず案内欄へ、ジウムゲジウムゲジウムゲのポントン百円、（もしくは二百円でも、御入用なだけ）食いたい。呑^のみたい。イモクテネ。と小さい広告おだしになれば、

その日のうちにお金、お送り申します。五年まえ、おたがいに帝大の学生でした。あなたは藤棚の下のベンチに横よこわり、いい顔をして、昼寝していました。私の名は、カメよカメよ、と申します。」

月日。

「きょうは妙に心もとない手紙拝見。熱の出る心配があるのにビールをのんだというのは君の手落ちではないかと考えます。君に酒をのむことを教えたのは僕ではないかと思いますが、万一にも君が酒で失敗したなら僕の責任のような気がして僕は甚だ心苦しいだろう。

すっかり健康になるまで酒は止よしたまえ。もつとも酒について僕は人に何も言う資格はない。君の自重をうながすだけのことである。送金を減らされたそうだが、減らされただけ生活をきりつめたらどんなものだろう。生活くらい伸びちぢみ自在になるものはない。至極簡単である。原稿もそろそろ売れて来るようになったので、書きなぐらないように書きためて大きい雑誌に送ること重要事項である。君は世評を気にするから急に淋しくなったりするのかもしれない。押し強くなっては自滅する。春になったら房州南方に移住して、漁師の生活など見ながら保養するのも一得ではないかと思

います。いずれは仕事に区切りがつかいたら萱野君と
いっしょに訪ねたいと思います。しばらく会わないの
で萱野君の様子はわからない。きょう、只今徹夜にて
仕事中、後略のまま。津島修二様。早川生。」

月日。

「玉稿昨日頂戴ちようだいしました。先日、貴兄からのハガキ
どういう理由だかはつきりしなかつたところ、昨日の
原稿を読んで意味がよくわかりました。先日の僕の依
頼ついでに就て、態度がいけなかつたら御免なさい。実はあ
の手紙、大変忙しい時間に、社の同僚と手分けして約

二十通ちかくを（先輩の分と新人の分と）書かねばならなかったので、君の分だけ、個人的な通信を書いて
いる時機がなかった。稿料のことを書かないのは却つかえ
て不徳義故誰ゆえにでも書くことにしている。一緒に依頼
した共通の友人、菊地千秋君にも、その他の諸君にも、
みんな同文のものを書いたただけだ。君にだけ特別個人
的に書けばよかったであろうが、そういう時間がな
かったことは前述の通りだ。あの依頼の手紙を書いて、
君の気持を害そしなう結果になろうとは夢にも思わなかつ
たし、悪意をもつてああいうことをお願いするほど愚
かな者もないだろう。君が神経質になり過ぎている

ものとしたか、僕には考えられない。君が僕に友情を
持っていてくれるのなら、君こそ、そういう小さなこ
とを、悪く曲解する必要はないではないか。尤も、君
が痛罵つうばしたような態度を、平生僕がとっているとすれ
ば、（君には勿論そういう態度をとったこともなければ、
あの手紙がそういう態度に出たものでないことは前述
の通りだ。）僕は反省しなければならぬし、自分の生活
に就ても考えなければならぬ、事実考えてもいる。
君がほんとの芸術家なら、ああいう依頼の手紙を書く
者と、貰う者と、どちらがわびしい気持ちで生きてい
るか容易に了解できることと思う。兎とに角かく、あの原

稿は徹頭徹尾、君のそういう思い過しに出ているものだから、大変お気の毒だけれども書き直してはくれないだろうか。どうしても君が嫌だと云えば、致し方がないけれども、こういう誤解や邪推じやしういに出発したことで君と喧嘩したりするのは、僕は嫌だ。僕が君を侮じよくしたと君は考えたらしいけれど兎に角、僕は君のあの原稿の極端なる軽べつにやられて昨夜は殆んど一睡ほともしなかつた。先日のあの僕の手紙のことに関する誤解は一掃してほしい。そして、原稿も書き直してほしい。これはお願いだ。君はああいうことでしか（然も、君自身の誤解で）非常に怒ったけれど、そういうことを

一々怒っているは、僕など、一日に幾度怒っていないければならぬか、数えあげられるものではない。君が精いっぱい生きてるように、僕だつて精いっぱい生きているのだ。君のこれからのことや、僕のこれからのことや、そういうことは、こんど会った時、話したい。一度、君の病床に訪ねて、いろいろ話したいと思つているのだけれど、僕も大変多忙な上に、少々神経衰弱気味で参っているのだ。正月にでもなつたら、ゆっくりお訪ねできることと思う。永野、吉田両君には先夜会つた。神経をたかぶらせないでお身お大事に勉強してほしい。社の余暇を盗んで書いたので意を尽

せないところが多いだろうが、折り返し、御返事をま
ちます。武蔵野新聞社、学芸部、長沢伝六。太宰治様。
追伸^{ついでしん}、尚原稿書き直して戴^{いた}ければ、二十五日までで結
構だ。それから写真を一枚、同封して下さい。いろい
ろ面倒な御願いで恐縮だが、なにとぞよろしく。乱筆
乱文多謝。」

「ちかごろ、毎夜の如く、太宰兄についての、薄気味
わるい夢ばかり見る。変りは、あるまいな。誓います。
誰にも言いません。苦しいことがあるのじゃないか。
事を行うまえに、たのむ、僕にちよつと耳打ちして呉^く
れ。一緒に旅に出よう。上海^{シャンハイ}でも、南洋でも、君の好

きなどころへ行こう。君の好いている土地なら、津軽だけはごめんだけれど、あとは世界中いずこの果にても、やがて僕もその土地を好きに思うようになります。これぼつちも疑いなし。旅費くらいは、私かせぎます。ひとり旅をしたいなら、私はお供いたしませぬ。君、なにも、していないだろうね？ 大丈夫だろうね？ さあ、私に明朗の御返事下さい。黒田重治。太宰治学兄。」

「貴翰きかん拝誦。病氣かいかく恢復のおもむきにてなよりのことと思ひます。土佐から帰つて以来、仕事に追われ、見舞にも行けないが、病氣がよくなればそれでいいと

思っている。今日は十五日締切の小説で、大童おおわらわになつて
いるところ。新ロマン派の君の小説が深沼氏の推讃すいさん
するところとなつて、君が発奮する気になつたとはい
重のよろこびである。自信さえあれば、万事はそれ
うまく行く。文壇も社会も、みんな自信だけの問題だ
と、小生痛感している。その自信を持たしてくれるの
は、自分の仕事の出来栄できばえである。循環する理論であ
る。だから自信のあるものが勝ちである。拙宅の赤ん
ぼさんは、大介という名前の由。小生旅行中に女房が
勝手につけた名前なまえで、小生の気に入らない名前である。
しかし、最早もはや御近所ごきんじよへ披露ひろうしてしまつた後だから泣

寝入りである。後略のまま頓首^{とんしゅ}。大事にしたまえ。萱野君、旅行から帰つて来た由。早川俊二。津島君。」

月日。

「返事よこしてはいけないと言われて返事を書く。一、長篇のこと。云われるまでもなく早まった気がして居る。屑物屋^{くずものや}へはらうつもりで承知してしまったのだが、これはしばらく取消しにしよう。この手紙といっしょに延期するむね葉書かいた。どうせ来年の予定だったから、来年までには、僕も何とかなるつもりでいた――が、それまでに一人前になれるかどうか、疑問に思

われて来た。『新作家』へは、今度書いた百枚ほどのもの連載しようと思つてゐる。あの雑誌はいつまでも、僕を無名作家にしたがつてゐる。『月夜の華』というのだ。下手へたくそにいつていたとしても、むしろ、この方を宣伝して呉れ。提灯ちようちんをもつことなんて一番やさしいことなんだから。二、僕と君との交友が、とにかく、色眼鏡でみられるのは仕方がないのではないかな。中畑というのにも僕は一度あつてるきりだし、世間さまに云寄せたら、僕が君をなんとかしてケチをつけたい破目はめに居そうにみえるのではないかしら。僕だけの耳へでも、僕が君をいやみに言いふらして居るらしい噂

が聞えてくる。そして人からいろいろ忠告されたりする。構わんじやろ。君と僕が対立的にみられるのは僕にはかえって面白いくらいだ。たとえばポオとレニンが比較されて、ポオがレニンに策士だといって蔭口かげぐちをきいたといった風なゴシツプは愉快だからな。何よりも僕の考えていることは、友人面をしてのさばりたくないことだ。君の手紙のうれしかったのは、そんな秘かくれた愛情の支持者があの中にいたことだ。君が神なら僕も神だ。君が葦あしなら——僕も葦だ。三、それから、君の手紙はいくぶんセンチではなかったか。というのは、よみながら、僕は涙が出るところだったからだ。

それを僕のセンチに帰するのは好くない。ぼくは、恋文を貰った小娘のように顔をあからめていた。四、これが君の手紙への返事だったら破いて呉れ。僕としては依頼文のつもりだった。たった一つ、僕のこんどの小説を宣伝して呉れということ。五、昨日、不愉快な客が来て、太宰治は巧くやったねと云った。僕は不愛想に答えた。『彼は僕たちが出したのです』——今日つくづく考えなおしている。こんなのがデマの根になるのではないか——と。『ええ』とっておけば好いのかもしいれない。それともまた『彼は立派な作家です』と言えばいいのか。ぼくはいままでほど自由な気持で

君のことを饒舌しやべれなくなつたのを哀しむ。君も僕も
差支さしつかえないとしても、聞く奴が驚馬どばなら君と僕の名に
関る。太宰治は、一寸ちよつと、偉くなりすぎたからいかんの
だ。これじゃ、僕も肩を並べに行かなくては。漕ぎ着
こう。六、長沢の小説よんだか。『神秘文学』のやつ。
あんな安直な友情のみせびらかしは、僕は御免だ。正
直なのかもしれないが、文学つてやつは、もつとひね
くれてるんじゃないかしら。長沢に期待すること少く
なつた。これも哀しいことの一つだ。七、長沢にも会
いたいと思ひながら、会わずにいる。ぼくはセンチに
なると、水いらすずで雑誌を作ることばかり考える。君

はどんな風に考えるかしらんが、僕と君と二人だけ
いる世界だけが一番美しいのではないだろうか。八、
無理をしてはいかん。君は馬鹿なことを言った。君が
先に出て先にくたばる術はない。僕たちを待たなくて
はいかん。それまでは少くとも十年健康で待たなくて
はいかん。根気が要る。僕は指にタコができた。九、
これからは太宰治がじゃんじゃん僕なんかを宣伝する
時になったようだ。僕なんか、ほくほく悦に入ってい
る。『こんなのが仲間にいるとみんな得をするから
な。』と今度ぼくは誰かに（最も不愉快な客が来たら）
言つてやろうと、もくろんでいる。『虎とらの威を借る

云々』とドバどもはいいふらすだろう。そしたら『あいつは虎でないともいうのか』と逆襲してやる。『そして僕が狐でないと誰が言いましたか。』十、君不看きみみずや、そらがんのいろ、かたらさればうれいなきになりにたり 双眼色、不語似無愁——いい句だ。では元気で、

僕のことを宣伝して呉れと筆をとること右の如し。林

彪太郎。太宰治様机下。きか」

「メクラソウシニテヲアワセル。」（電報）

「めくら草紙を読みました。あの雑誌のうち、あの八頁だけを読みました。あなたは病氣骨の髄を犯しても不倒である必要があります。これは僕の最大限の君への心の言葉。きょう僕は疲れて大へん疲れて字も書き

づらいのですが、急に君へ手紙を出す必要をその中で感じましたので一筆。お正月は^{やまとのくに}大和国桜井へかえる。永野喜美代。」

「君は、君の読者にかこまれても、赤面してはいけない。頬^{ほお}被^{かぶ}りもよせ。この世の中に生きて行くためには、^{かいじゆう}晦渋ではあるけれども、一つの頂点、傑作の相貌を具えていた。君は、以後、讃辞を素直に受けとる修行をしなければいけない。吉田生。」

「はじめて、手紙を差上げる無礼、^{なにとぞ}何卒お許し下さい。お蔭様で、私たちの雑誌、『春服』も第八号をまた出せ

るようになりました。最近、同人に少しも手紙を書かないので連中の気持は判りませんが、ぼくの云いたいののは、もうお手許迄てもとまでとどいているに違いない『春服』八号中の拙作のことであります。興味がなかつたら後は読まないで下さい。あれは昨年十月ぼくの負傷直前の制作です。いま、ぼくはあれに対して、全然気恥しい気持、見るのもいやな気持に駆られています。太宰さんの葉書なりと一枚欲しく思っています。ぼくはいま、ある女の子の家に毎晩のように遊びに行つては、無駄話をして一時頃帰つてきます。大して惚れていないのに、せんだつて、真面目に求婚して、承諾されま

した。その帰り可笑しく、嘖き出している最中、——
いや、どんな気持だったかわかりません。ぼくはいつ
も真面目でいたいと思っていますのです。東京に帰って
文学三昧さんまいに耽りたくてたまりません。このままだった
ら、いつそ死んだ方が得なような気がします。誰もぼ
くに生半可なまはんかな関心なぞ持つていて貰いたくありません。
東京の友達だつて、おふくろだつて貴方だつてそうで
す。お便り下さい。それよりお会いしたい。大ウソ。
中江種一。太宰さん。」

月日。

「拝啓。その後、失礼して居ります。先週の火曜日（？）にそちらの様子見たく思い、船橋に出かけようと立ち上った処ところに君からの葉書来りきた、中止。一昨夜、突然、永野喜美代参り、君から絶交状送られたとか、その夜は遂ついにに徹夜、ぼくも大変心配していた処、只今、永野よりの葉書にて、ほどなく和解できた由うけたまわり、大いに安堵あんどいたしました。永野の葉書には、『太宰治氏を十年の友と安んじ居ること、真情吐露とろしてお伝え下され度たく』とあるから、原因が何であったかは知らぬが、益々交友の契ちぎりを固くせられるよう、ぼくからも祈ります。永野喜美代ほどの異質、近頃沙漠の花

ほどもめずらしく、何卒、良き交友、続けられること、おねがい申します。さて、その後のからだの調子お知らせ下さい。ぼく余りお邪魔しに行かぬよう心掛け、手紙だけでも時々書こうと思ひ、筆を執ると、えい面倒、行つてしまえ、ということになる。手紙というもの、実にまどろこしく、ぼくには不得手。屢々、自分で何をかいたのか呆れる有様。近頃の句一つ。自嘲。齒こぼれし口の寂さや三ツ日月。やつぱり四五日中にそちらに行つてみたかと思うが如何？ 不一。黒

田重治。太宰治様。」

月日。

「お問い合わせの玉稿、五、六日まえ、すでに拝受いたしました。きょうまで、お礼^{しゅんじゅん}逡巡、欠礼の段、おいかりなさいませぬようお願い申します。玉稿をめぐり、小さい騒ぎが、ございました。太宰先生、私は貴方^{あなた}をあくまでも支持いたします。私とて、同じ季節の青年でございます。いまは、ぶちまけて申しあげます。当雑誌の記者二名、貴方と決闘すると申しています。玉稿、ふざけて居る。田舎^{いなか}の雑誌と思つてばかりにして居る。おれたちの眼の黒いうちは、採用させぬ。生意気な身のほど知らず、等々、たいへんな騒ぎでございます。

した。私には成算ございましたので、二、三日、様子を見て、それから貴方へ御寄稿のお礼かたがた、このたびの事件のてんまつ大略申し述べようと思つて居りましたところ、かれら意外にも、けさ、編輯主任たるへんしゅう私には一言の挨拶もなく、書留郵便にて、玉稿御返送敢行いたせし由、承知いたし、いまは、私と彼等二人の正義づらとの、面目問題でございませう。かならず、厳罰に附し、おわびの万分の一、当方の誠意かついてただきたく、飛行郵便にて、玉稿の書留より一足さきに、額の滝、油汗ふきふき、平身低頭のおわび、以上の如くでございませう。なお、寸志おしるしだけにても、

御送り申そうかと考えましたが、これ又、かえつて失
礼に当りはせぬか、心にかかり、いまは、とつきつ 訥吃、そうろう 蹠踉、
七重ななえの膝やえを八重やえに折り曲げての平あやまり、他日、つ
ぐない、内心、固く期して居ります。俗への憤怒。貴
方への申しわけなき。文字さえ乱れて、細くまた太く、
ひよろひよろ小粒が駈けまわり、突如、牛ほどの岩石
の落下、この悪筆、乱筆には、われながら驚き呆れて
居ります。創刊第一号から、こんな手違いを起し、不
吉きわまりなく、それを思うと泣きたくありません。こ
のごろ、みんな、一オクタアヴくらい調子に変化して
居るのにお気付きございませぬか。私は、もとより、

私の周囲の者まで、すべて。大阪サロン編集部、高橋安二郎。太宰先生。」

「前略。しつれい申します。玉稿、本日別封書留にてお送りいたしました。むかしの同僚、高橋安二郎君が、このごろ病気がいけなくなり、太宰氏、ほか三人の中堅、新進の作家へ、本社編集部の名をいつわり、とんでもない御手紙さしあげて居ることが最近、判明いたしました。高橋君は、たしか三十歳。おととしの秋、社員全部のピクニックの日、ふだん好きな酒も吞まず、青い顔をして居りましたが、すすきの穂を口にくわえて、同僚の面前にのっそり立ちふさがり薄目つかって

相手の顔から、胸、胸から脚、脚から靴、なめまわすように見あげ、見おろす。帰途、夕日を浴びて、ながいながいひとりごとがはじまり、見事な、血したたるが如き紅葉もみじの大なる枝を肩にかついで、下腹部を殊更ことさらにに前へつき出し、ぶらぶら歩いて、君、誰にも言っちゃいけないよ、藤村先生とうそんね、あの人、背中一ぱいに三百円以上のお金をかけて刺青ほりものしたのだよ。背中一ぱいに金魚が泳いで居る。いや、ちがった、おたまじゃくしが、一千匹以上うようよしているのだ。山高帽子が似合うようでは、どだい作家じゃない。僕は、この秋から支那服しなふく着るのだ。白足袋しろたびをはきたい。白足袋は

いて、おしるこたべていると泣きたくなるよ。ふぐを
食べて死んだひとの六十パーセントは自殺なんだよ。
君、秘密は守って呉くれるね？ 藤村先生の戸籍名は河
内山そうしゅんというのだ。そのような大へんな秘密
を、高橋の呼吸が私の耳朶みみたぶをくすぐって頗すこぶる弱った
ほど、それほど近く顔を寄せて、こつそり教えて呉れ
ましたが、高橋君は、もともと文学青年だったのです。
六、七年まえのことです。ごいりますが、当時、信濃の山々、
奥深くにたてこもって、創作三昧、しずかに一日一日
を生きて居られた藤村、島崎先生から、百枚ちかくの
約束の玉稿、(このときの創作は、文豪老年期を代表す

る傑作という折紙つきました。) ぜひともしただいて
来るよう、まして此のたびは他の雑誌社に奪われる危
険もあり、如才じよざいなく立ちまわれよ、と編輯長に言われ
て、ふだんから生真面目の人、しかもそのころは未だ
二十代、山の奥、竹の柱の草庵に文豪とたつた二人、
囲炉裏いろりを挟んで徹宵お話うけたまわれるのだと、期待
緊張、それがために顔もやや青ざめ、同僚たちのにぎ
やかな声援にも、いちいち口を引きしめては深くうな
ずき、決意のほどを見せるのです。廻転ドアにわれと
わが身を音たかく叩たたきつけ、一直線に旅立ったときの
ひよろ長い後姿には、笑ってすまされないものがござ

いました。四日目の朝、しょんぼり、びしょ濡れぬになつて、社へ帰つてまいりました。やられたのです。かれの言いぶんよに拠れば、字義どおりの一足ちがい、宿の朝ごはんの後、熱い番茶に梅干いれてふうふう吹いて呑んだのが失敗のもと、それがために五分おくれて、大事になつたとのこと、二人の給仕もいれて十六人の社員、こぞつて同情いたしました。私なども編あみあげ靴の紐ひもを結び直したばかりに、やはり他社のものに先をこされて、あやうく首切られそうになつたかなしい経験がございます。高橋君は、すぐ編輯長に呼ばれて、三時間、直立不動の姿勢でもつて、説教きかされ、お

説教中、五たび、六たび、編輯長をその場で殺そうと
決意したそうでございます。とうとう仕舞いには、卒
倒、おびただしき鼻血。私たち、なんにも申し合わせ
なかったのに、そのあくる日、二人の給仕は例外、ほ
かの社員ことごとく、辞表をしたためて持つて来てい
たのでございます。そうして、くやくして、みんな編
輯長室のまえの薄暗い廊下でひしと一かたまりにかた
まって、ことにも私、どうにもこうにも我慢ならず、
かたわらの友人の、声しのばせての戯^{きよ}戯^ぎに誘われ、大
声放って泣きました。あのときの一種崇高の感激は、
生涯にいちどあるか無しかの貴重のものと思ひます。

ああ、不要のことのみ書きつらねました。おゆるし下さい。高橋君は、それ以後、作家に限らず、いささかでも人格者と名のつく人物、一人の例外なく蛇蝎視だかつしして、先生と呼ばれるほどの嘘うそを吐つき、などの川柳せんりゆうをときどき雑誌の埋草うめくさに使っていましたが、あれほどお慕いしていた藤村先生の『ト』の字も口に出しませぬ。よほどの事が、あつたにちがいございませぬ。昨年こぞの春、健康そこいよいよ害そこねて、今は、明確に退社して居ります。百日くらいまえに私はかれの自宅の病室を見舞ったのでございます。月光が彼のベッドのあらゆるくぼみに満ちあふれ、掬すくえると思いました。高橋は、

両の眉毛をきれいに剃り落していました。能面のごとき端正の顔は、月の光の愛撫に依り金属のようにつるつるしていました。名状すべからざる恐怖のため、私の膝頭が音たててふるえるので、私は、電気をつけようと嗚れた声で主張いたしました。そのとき、高橋の顔に、三歳くらいの童子の泣きべそに似た表情が一瞬ぱつと開くより早く消えうせた。『まるで気違いみたいだろう？』ともちまえの甘えるような鼻声で言つて、寒いほど高貴の笑顔に化していった。私は、医師を呼び、あくる日、精神病院に入院させた。高橋は静かに、謂わば、そろそろと、狂っていったのである。

味わいの深い狂いかたであると思惟しいたします。ああ。あなたの小説を、につぼんだと申して、幾度となく繰り返し繰り返し拝読して居る様子で、貴作、ロマネスクは、すでに諳誦あんしやうできる程度に修行したとか申して居たのに。むかしの佳よき人たちの恋物語、あるいは、とくべつに楽しかった御旅行の追憶、さては、先生御自身のきよらかなるロマンス、等々、病床の高橋君に書き送る形式にて、四枚、月末までにおねがい申しあげます。大阪サロン編輯部、春田一男。太宰治様。」

「君の葉書読んだ。単なる冷やかしに過ぎんではないか。君は真実の解らん人だね。つまらんとと思う。吉田

潔。」

「冠省。首くくる縄切れもなし年の暮。私も、大兄お
言いつけのものと同額の金子入用にて、八方狂奔。
岩壁、切りひらいて行きましよう。死ぬるのは、いつ
にても可能。たまには、後輩のいうことにも留意して
下さい。永野喜美代。」

「先日は御手紙有難う。又、電報もいただいた。原稿
は、どういうことにしますか。君の気がむいたように
するのが、一番いいと思う。×切は二十五、六日頃ま
では待てるのです。小生ただいま居所不定、（近くア
パートを捜す予定）だから御通信はすべて社宛に下さ

る様。住所がきまつたなら、お報せしらせする。要用のみで失敬。武蔵野新聞社学芸部、長沢伝六。」

月日。

「太宰さん。とうとう正義温情の徒にみごと一ぱい食わせられましたね。はじめから御注意申しあげて置いたら、こんなことにはならなかつたのでございますが、雑誌は、どこでもそうらしいですが、ひとりの作家を特に引きたててやることは、固く禁じられて居りますし、そのうえ、この社には、重役附きのスパイが多く、これからもあることゆえ、ものやわらかの人物には気

をつけて下さいまし。軽々しく、ふるまってははいけません。春田は、どんな言葉でおわびをしたのか、わかりませぬけれど、貴方あなたに書き直しさせたと言つて、この二、三日大自慢で、それだけ、私は、小さくなつていなければならず、まことに味気ないことになりました。太宰さん、あなたもよくない。春田が、どのような巧言を並べたてたかは、存じませぬけれど、何も、あんなにセンチメンタルな手紙を春田へ与える必要ございません。醜態です。猛省ねがいます。私、ちゃんとあなたのための八十円用意していたのに、春田などにたのんでは十円も危い。作家を困らせるのを、雑誌

記者の天職と心得て居るのだから、始末がわるい。私ひとりで、やきもきしてたつて仕様がなない。太宰さん、あなたの御意見はどうなんです。こんなになめられて、口惜くやしく思いませんか。私は、あなたのお家のこと、たいてい知って居ります。あなたの読者だからです。背中の痣あざの数まで知って居ります。春田など、太宰さんの小説ひとつ読んでいないのです。私たちの雑誌の性質上、サロンの出いりも繁く、席上、太宰さんの噂うわさなど出ますけれど、そのような時には、春田、夏田になつてしまつて熱狂の身ぶりよろしく、筆にするに忍びぬ下劣の形容詞を一分間二十発くらいの割合いで猛

射撃。可成りかなの変質者なのです。以後、浮気は固くつ
つしまなければいけません。このみそかは、それじゃ
困るのでしょうか？ 私は、もうお世話こうむごめん被ります。
八十円のお金、よそへまわしてしまいました。おひと
りで、やってごらんなさい。そんな苦勞も、ちつとは、
身になります。八方ふさがったときには、御相談下さ
い。苦しくても、ぶていさいでも、死なずにいて下さ
い。不思議なもので、大きい苦しみのつきには、きつ
と大きいたのしみが来ます。そうして、これは数学の
如くに正確です。あせらず御養生專一にねがいます。
来春は東京の実家へかえって初日を拝むつもりです。

その折、お逢いできればと、いささか、たのしみにして居ります。良薬の苦味、おゆるし下さい。おそらくは貴方を理解できる唯一人の四十男、無二の小市民、高橋九拝。太宰治学兄。」

下旬

月日。

「突然のおたよりお許し下さい。私は、あなたと瓜二つだ。いや、私とあなた、この二人のみに非ず。青年の没個性、自己喪失は、いまの世紀の特徴と見受けら

れます。以下、必ず一読せられよ。（一行あき。）刺し殺される日を持つて居る。（一行あき。）私は或る期間、穴蔵の中で、陰鬱いんうつなる政治運動に加担していた。月のない夜、私ひとりだけ逃げた。残された仲間は、すべて、いのちを失った。私は、大地主の子である。転向者の苦悩？ なにを言うのだ。あれほどたくみに裏切つて、いまさら、ゆるされると思っているのか。（一行あき。）裏切者なら、裏切者らしく振舞うがいい。私は唯物史観を信じている。唯物論的弁証法よに拠よらざれば、どのような些々ささたる現象をも、把握できない。十年來の信条であつた。肉体化さえ、されて居る。十年

後もまた、変ることなし。けれども私は、労働者と農民とが私たちに向けて示す憎悪と反撥とを、いささかも和^{やわ}けてもらいたくないのである。例外を認めてもらいたくないのである。私は彼等の単純なる勇気を二なく愛して居るがゆえに、二なく尊敬して居るがゆえに、私は私の信じている世界観について一言半句も言いでない。私の腐^{くちびる}った唇から、明日の黎明^{れいめい}を言い出すことは、ゆるされない。裏切者なら、裏切者らしく振舞うがいい。『職人ふぜい。』と噛^わんで吐き出し、『水吞^{みずのみ}百姓。』と嗤^{わら}いののしり、そうして、刺し殺される日を待つて居る。かさねて言う、私は労働者と農民

とのちからを信じて居る。(一行あき。)私は派手な衣服を着る。私は甲高い口調で話す。私は独り離れて居る。射撃し易くしてやって居るのである。私の心にもなき驕慢きょうまんの擬態ぎたいもまた、射手への便宜を思つての振舞いであろう。(一行あき。)自棄やけの心からではない。私を葬り去ることは、すなわち、建設への一歩である。この私の誠実をさえ疑う者は、人間でない。(一行あき。)私は、つねに、真実を語つた。その結果、人々は、私を非常識と呼んだ。(一行あき。)誓つて言う。私は、私ひとりのために行動したことはなかった。(一行あき。)このごろ、あなたの少しばかりの異風が、ゆがめ

られたポンチ画が、たいへん珍重されているというこ
とを、寂しいとは思いませんか。親友からの便りであ
る。私はその一葉のはがきを読み、海を見に出かけた。
途中、麦が一寸ほど伸びている麦畑の傍にさしかかり、
突然、ぐしゃつと涙が鼻にからまつて来て、それから
声を放つて泣いた。泣き泣き歩きながら私をわかつて
呉れている人も在るのだと思つた。生きていてよかつ
た。私を忘れないで下さい。私は、あなたを忘れてい
た。(一行あき。)その未見の親友の、純粹なるくやし
さが、そのまま私の血管にも移入された。私は家へか
えつて、原稿用紙をひろげた。『私は無頼ぶらいの徒ではな

い。』(一行あき。) 具体的に言つて呉れ。私は、どんな迷惑をおかけしたか。(一行あき。) 私は借銭をかえさなかつたことはない。私は、ゆえなく人の饗応きやうわうを受けたことはない。私は約束を破つたことはない。私は、ひとの女と私語を交えたことはない。私は友の陰口を言つたことさえない。(一行あき。) 昨夜、床の中で、じつとして居ると、四方の壁から、ひそひそ話声もれて来る。ことごとく、私に就ついての悪口である。ときたま、私の親友の声をさえ聞くのである。私を傷つければ、君たちは生きて行けないのだらうね。(一行あき。) 殴なぐりたいだけ殴れ。踏みにじりたいだけ踏

みにじるがいい。嗤わらいたいただけ嗤え。そのうちに、ふと気がついて、顔を赧あかくするときが来るのだ。私は、じつとしてその時期を待っていた。けれども私は間違っていた。小市民というものは、こちらが頭を低くすればするほど、それだけ、のしかかって来るものであった。そう気がついたとき、私は、ふたたび起きあがることが出来ぬほどに背骨を打ちくだかれていたようだ。(一行あき。) 私は、このごろ、肉親との和解を夢に見る。かれこれ八年ちかく、私は故郷へ帰らない。かえることをゆるされないのである。政治運動を行つたからであり、情死を行つたからであり、卑いやしい女を

妻に迎えたからである。私は、仲間を裏切りそのうえ生きて居れるほどの恥知らずではなかった。私は、私を思つて呉れていた有夫の女と情死を行った。女を拒むことができなかったからである。そののち、私は、現在の妻を迎えた。結婚前の約束を守つたまでのことである。私、十九歳より二十三歳まで、四年間土曜日ごとに逢つていたが、私はいちども、まじわりをしなかつた。けれども、肉親たちは、私を知らない。よそに嫁いで居る姉が、私の一度ならず二度三度の醜態のために、その嫁いで居る家のもものに顔むけができずに夜々、泣いて私をうらんでいるということや、私

の生みの老母が、私あるがために、亡父の跡を嗣いで居る私の長兄に対して、ことごとく面目を失い、針のむしろに坐った思いで居るといふことや、また、私の長兄は、私あるがために、くにの名誉職を辞したとか、辞そうとしたとか、とにかく、二十数人の肉親すべて、私があたりまえの男に立ちかえつて呉れるよう神かけて祈つて居るといふふうの噂話を、仄聞そくぶんすることがあるのである。けれども、私は、弁解しない。いまこそ血のつながりというものを信じたい。長兄が私の小説を読んで呉れる夢のうれしさよ。佐藤春夫の顔が、私の亡父の顔とあんなに似ていなかったら、私は、あの

客間へ二度と行かなかつたかも知れない。(一行あ
き。)肉親との和解の夢から、さめて夜半、しれもの、
ふと親孝行をしたく思う。そのような夜半には、私も
また、菊池寛のところへ手紙を出そうか、サンデー毎
日の三千円大衆文芸へ応募しようか、何とぞして芥川
賞をもらいたいものだ、などと思いを千々にくだいて
みるのであるが、夜のしらじらと明け放れると共に、
そのような努力が、何故とも知らず、馬鹿くさく果無^{はかな}
く思われ、『やがて死ぬるいのち。』という言葉だけが
ありがたく、その日も為^なすところなく迎えてそうして
送っていただけなのである。けれども、——(一行あ

き。) 一日読書をしては、その研究発表。風邪かぜで三日ほど寝ては、病床閑語。二時間の旅をしては、芭蕉ばしやうみたいな旅日記。それから、面白くも楽しくも、なんともない、創作にあらざる小説。これが、日本の文壇の現状のようである。苦悩を知らざる苦悩者の数のおびただしさよ。(一行あき。) 私は今迄、自己を語る場合に、どうやら少しはにかみ過ぎていたようだ。きようよりのち、私は、あるがままの自身を語る。それだけのことである。(一行あき。) 語らざれば憂い無きに似たりとか。私は言葉を軽蔑していた。瞳ひとみの色でこと足りると思っていた。けれども、それは、この愚かしき世

の中には通じないことであつた。苦しいときには、『苦しい！』とせいぜい声高に叫ばなければいけないようだ。黙っていたら、いつしか人は、私を馬扱いにしてみました。（一行あき。）私は、いま、取りかえしのつかない事からを書いている。人は私の含羞多きはじらいむかしの姿をなつかしむ。けれども、君のその嘆声は、いつわりである。一得一失こそ、ものの成長に追隨するさだめではなかつたか。永い眼で、ものを見る習性をこそ体得しよう。（一行あき。）甲斐かひなく立たむ名こそ惜しけれ。（一行あき。）なんじらだんじき断食するとき、かの偽善者のごとく、悲しき面容おもせもちをすな。（マタイ六章十六。）

キリストだけは、知っていた。けれども神の子の苦悩に就いては、パリサイびとでさえ、みとめぬわけにはいかなかったのである。私は、しばらく、かの偽善者の面容を真似^{まね}ぶ。(一行あき。)百千の迷の果、私は私の態度をきめた。いまとなつては、私は、おのが苦悩の歴史を、つとめて嚴肅に物語るよりほかはなからう。てれないように。てれないように。(二行あき。)私も亦、地平線のかなた、久遠の女性を見つめている。きょうの日まで、私は、その女性について、ほんの断片的にしか語らず私ひとりの胸にひめていた。けれども私の誇るべき一先輩が、早く書かなければ、君、子供が

ゆきうしぎ

雪兎を綿でくるんで机の引き出しにしまつて置くよ
うなもので、溶けてしまふじやないか。あとでひとり
で楽しまむものと、机の引き出し、そつと覗いてみた
ときには、溶けてしまつて、南天なんてんの赤い目玉が二つの
こつていたという正吉の失敗とかいう漫画をうちの子
供たち読んでいたが、美しい追憶も、そんなものだよ、
パッション失わぬうちに書け、鉄は赤いうちに打つべ
し、と言われていているよ。私は、けれども聞えぬふりし
た。しらじらしく、よそごとのみを興ありげに話すの
だ。兎どころか、私のふるさとでは美しい女さえ溶け
てしまうのです。吹雪ふぶきの夜に、わがやの門口に行倒れ

ていた唇の赤い娘を助けて、きれいな上に、無口で働
きものゆえ一緒に世帯しよたいを持って、そのうちにだんだん
あたたかくなると共に、あのきれいなお嫁も瘦やせて元
気がなくなり、玉のようなからだも、なんだかおとろ
えて、家の中が暗くなつた。主あるじは、心細さに堪えかね、
一日、たらいにお湯を汲みいれて、むりやりお嫁に着
物を脱がせ、お嫁の背中を洗つてやつた。お嫁はしく
しく泣きながら、背中洗つてくれているやさしかった
あるじ主あるじにむかつて、『私が死んでも、——』と言いかけて、
さらさらと絹ずれの音がしてお嫁のすがたが見えなく
なつた。たらいの中には桜貝さくらがいの櫛くしと笄こうがいが浮んでい

るだけであつた。雪女、お湯に溶けてしまつた、という物語。私は尚も言葉をつづけて、私、考えますに葛くずの葉の如く、この雪女郎のお嫁が懐妊かいにんし、そのお腹をいためて生んだ子があつたとしたなら、そうして子供が成長して、雪の降る季節になれば、雪の野山、母をあこがれ歩くものとしたなら、この物語、世界の人、ことごとくを充分にうつとりさせ得ると、信じて居る。そう言いむすんだとき、見よ、世界の人の中のひとり、私の先輩も、頬を染めて浮かれだし、サロンの空気がたいへんパツシヨネエトにされてしまつて、いつしか、私のひめにひめたるお湯にも溶けぬ雪女について問わ

れるがままに語って聞かせて居たのである。

——年齢。

——十九です。やくどしです。女、このとしには必ず何かあるようです。不思議のことに思われます。

——小柄だね？

——ええ、でもマネキン嬢にもなれるのです。

——というと？

——全部が一まわり小さいので、写真ひきのばせば、ほとんど完璧かんぺきの調和を表現し得るでしょう。両脚がしなやかに伸びて草花の茎のようで、皮膚が、ほどよく冷い。

——どうかね。

——誇張じゃないんです。私、あのひとに関しては、どうしても嘘をつけない。

——あんまり、ひどくだましたからだ。

——おどろいたな。けれども、全く、そうなんです。

私、二十一歳の冬に角帯かくおびしめて銀座へ遊びにいった、

その晩、女が私の部屋までついて来て、あなたの名まえなんていうの？ と聞くから、ちょうど、そこに海

野三千雄、ね、あの人の創作集がころがっていて、私は、海野三千雄、と答えてしまった。女は、私を三十一、二歳と思っているらしく、もすこし有名の人かと

思った、とほつと肩を落して溜息をついて、私は、あのときぐらい有名になりたく思ったことございませぬ。のどが、からから枯渴こかつして、くろい煙をあげて焼けるほどに有名を欲しました。海野三千雄といえ、ひところ文壇でいちばん若くて、いい小説もかいていました。その夜から、私、学生服を着ている時のほかには、どこへ行つても、海野三千雄で、押しとおさなければならなくなつた。いちど、にせものをつとめると、不安で不安で夜のめも眠れず、それでいて、そのにせもの勤めをよそうとはせず、かえつて完璧の一点のすきのないにせものになろうと、そのほうにだけ心をくだ

くものです。不思議なものです。

——面白いね。つづけたまえ。

——たった一度きりの女なら、海野三千雄もよろしゅうございましょうが、二度、三度逢あつていいるうちに、窮屈になつて、ひとりで悶悶転転いたしました。女は、その後、新聞の学芸欄などに眼をとおす様子で、きょう、あなたの写真が出ていた。ちつとも似ていない。どうして、あんなに顔をしかめるの？ 私、お友達に笑われちゃつた。

——君は、むかし、なにか政治運動していたとか、そのころのことかね？

——は、そうです。私、文化運動は性に合わず、殊ことにもプロレタリア小説ほど、おめでたいものはないと思つていましたから、学生とは、離れて、穴蔵の仕事ばかりをしていました。いつか、私の高等学校時代からの友人が、おつかなびつくり、或る会合の末席に列りっていて、いまにこの辺、全部の地区のキャップが来るぞと、まえぶれがあつて、その会合に出ているアルバイタアたちでさえ、少し興奮して、ざわめきわたつて、或る小地区の代表者として出席していた私のその友人は、もう夢みるような心地こころで、やがて時間に一秒の狂いもなく、みしみし階段の足音が聞えて、やあ、

といいながらはいって来たひよろ長い男の顔が、はじめは、まぶしくて、はつきり見えなかつたが、よく見ると、その金ぶち眼鏡のにやけた男が、まごうかたなき、私、ええ、この私だったので、かれ、あのときのうれしさは忘じぼうがたいと、いまでもよく申しています。天にも昇るうれしさだったそうです。もちろんそのときには、ちらと瞳で笑い合つたきりで、お互い知らんふりをしていました。あんな運動をして、毎日追われにくらしていて、ふと、こちらの陣営に、思いがけない旧友の顔を見つけたときほど、うれしいことがございませぬ。

——よく、つかまらなかつたね。

——ばかだから、つかまるのです。また、つかまっても、一週間やそこらで助かる手もあるのです。そのうちに私、スパイだと言われたり何かして、いやになつて、仲間から、逃げることだけ考えていました。そのころは、毎夜、帝国ホテルにとまっています。やはり作家、海野三千雄の名前で。名刺もつくらせ、それからホテルの海野先生へ、ゲンコウタノムの電報、速達、電話、すべて私自身で発して居りました。

——不愉快なことをしたものだね。

——厳肅なるべき生活を、茶化して、もてあそびも

のにしているのが、不愉快なのでしょう。ごもつとも
でございますが、当時、そんなことでもしなければ、
私、おそらくは三十種類以上の原因で、自殺してしまっ
ています。

——でも、そのときだって、やっぱり、情死おこなっ
たんだろう。

——ええ、女が帝国ホテルへ遊びに来て、僕がボオ
イに五円やって、その晩、女は私の部屋へ宿泊しまし
た。そうして、その夜ふけに、私は、死ぬるよりほか
に行くところがない、と何かの拍子に、ふと口から滑
り出て、その一言が、とても女の心にきいたらしく、

あたしも死ぬる、と申しました。

——それじゃあ、あなたと呼ばば死のうよと答える、そんなところだ。極端にわかりが早くなつてしまつて
いる。君たちだけじゃないようだぜ。

——そうらしいのです。私の解放運動など、先覚者
として一身の名誉のためのものと言つて言えないこと
もなく、そのほうで、どんどん出世しているうちは、
面白く、張り合いもございましたが、スパイ説など出
て来たんでは、遠からず失脚ですし、とにかく、いや
でした。

——女は、その後、どうなつたね？

——女は、その帝国ホテルのあくる日に死にました。

——あ、そうか。

——そうなんです。鎌倉の海に薬品を呑んで飛びこみました。言い忘れましたが、この女は、なかなかの知識人で、似顔絵がたいへん巧うまかった。心が高潔だったので、実物よりも何層倍となく美しい顔を描き、しかもその画には秋風のような断腸だんちようのわびしさがにじみ出て居りました。画はたいへん実物の特徴をとらえていて、しかもノオブルなのです。どうも、ことしの正月あたりから、こう、泣癖なみがついてしまつて、困つて居ります。先日も、佐渡情話とか言う浪花節なになぶしのキネ

マを見て、どうしてもがまんができず、とうとう大声をはなつて泣きだして、そのあくる朝、かわや 厠で、そのキネマの新聞広告を見ていたら、また嗚咽おえつが出て来て、家人に怪しまれ、はては大笑いになって、もはや二度と、キネマへ連れて行けぬという家人の意見でございました。もう、いいのです。つづきを申しましょう。十年まえの話です。なぜ、あるとき、私が鎌倉をえらんだのか、長いこと私の疑問でございましたが、きのう、ほんの、きのう、やっと思い当りました。私、小学生のころ、学芸大会に、鎌倉名所の朗読したことがございました、その折、練習に練習を重ねて、ほとん

ど諳誦できるくらいになってしまいました。七里ヶ浜の磯いそづたい、という、あの文章です。きつと子供ながら、その風景にあこがれ、それがしみついて離れず、潜在意識として残っていて、それが、その鎌倉行になってあらわれたのではなからうかと考え、わが身を、いじらしく存じました。鎌倉に下車してから私は、女にお金を財布さいふぐるみ渡してしまいました。女は、私の豪華な三徳さんとくの中を覗のぞいて、あら、たった一枚？ と小聲で呟つぶやき、私は身を切られるほど恥かしく思ったのを忘れずに居る。私は、少しめちやめちやになって、おれはほんとうは二十六歳だ、とそれでも、まだ五歳

も多く告白してみせましたが、女は、たった二十六？
と云つて黒めがちの眼をくるつと大きく開いて、それ
から指折りかぞえ、たいへん、たいへん、と笑いなが
ら言つて、首をちぢめて見せましたが、なんの意味だつ
たのかしら、いまさら尋ねる便りもございませぬが、
たいへん気にかかります。

——あかるいうちに飛び込んだのかね？

——いいえ。それでも名所があるきまわつて、はち
まん様のまえで、飴あめを買つて食べましたが、私、その
とき右の奥歯の金冠二本をだめにしてしまつて、いま
でもそのままにして放つて置いてあるのですが、時々、

しくしくいたみます。

——ふつと思ひ出したが、ヴェルレエヌ、ね、あの
人、一日、教会へ韋駄天走りいだてんばしに走って行って、さあ私
は、ざんげする、告白する、何もかも白状する、ざん
げ聴聞僧ちようもんそうは、どこに居られる、さあ、さあ私は言つて
しまふ、とたいへんな意気込で、ざんげをはじめたそ
うですが、聴聞僧は、清浄の眉をそよとも動てよがすこと
なく、窓のそとの噴水を見ていて、ヴェルレエヌの泣
きわめきつつ語りつづけるめんめんの犯罪史の、一瞬
の切れ目に、すぽんと投入した言葉は、『あなたはけも
のと交つた経験をお持ちですか？』ヴェル氏、仰天し

て、ころげるようにして廊下へ飛び出し、命からがら逃げかえったそうで、僕は、どうも、人のざんげを聞くことが得^{えて}手じやないのです。いまはやりの言葉で言えば心臓が弱いのです。かの勇猛果敢なざんげ聴聞僧の爪のあかでも、せんじて呑みたいほうで、ね。

——ざんげじやない。のろけじやない。救いを求めているのでもない。私は、女の美しさを主張しているのです。それだけの事です。こうなつて来ると、お仕舞いまで申しあげます。女は、歩きながら、ずいぶん思いつめたような口調で、かえらない？ と小声で言った。あたしは、あなたのおめかけになります。家

から一步も外へ出るな、とあれば、じつとして、うちに隠れて居ります。一生涯、日かげ者でもいいの。私は、鼻で笑った。人の誠実を到底理解できず、おのれの自尊心を満足させるためには、万骨を枯らして、尚、平然たる姿の二十一歳、自矜じきようの怪物、骨のずいからの虚栄の子、女のひとの久遠の宝石、真珠の塔、二つなく尊い贈りものを、ろくろく見もせず、ぽんと路のかたわらのどぶに投げ捨て、いまの私のかたちは、果して軽快そのものであつたらうか、などそんなことだけを気にしている。

——はははは。今夜はなかなか能弁だね。

——笑いごとではないのです。そのような奇妙な、『ヴァイオリンよりは、ケエスが大事式』の、その方面に於ける最もきびしい反省を試みるのでした。江の島の橋のたもとに、新宿へ三十分、渋谷へ三十八分と一字一字二尺平方くらいの大きさで書かれて居る私設電車の絵看板、ちらと見て、さつさと橋をわたりはじめた。からころと駒下駄こまげたの音が私を追いかけ、私のすぐ背後まで来てから、ゆっくりあるいて、あたし、きめてしまいました。もう、大丈夫よ、先刻までの私は、軽蔑されてもしかたがないんだ。

——非常に素直な人なんだね。

——そうです、そうです。判つて呉れましたね？
やっぱり、お話し申しあげてよかつた。もつと、もつ
と聞いて下さい。

——よし。ぜひとも、聞かせて下さい。竹や、お茶。

——飛びこむよりさきにまず薬を呑んだのです。私
が呑んで、それから私が微笑ほほえみながら、姫や、敵のひ
げむじやに抱かれるよりは、父と一緒に死にたまえ。
少しも早う、この毒を呑んで死んでお呉れ。そんなた
わむれの言葉を交かわしながら、ゆとりある態度で呑みお
わつて、それから、大きいひらたい岩にふたりならん
で腰かけて、両脚をぶらぶらうごかしながら、静かに

薬のきく時を待つて居ました。私はいま、徹頭徹尾、死なねばならぬ。きのう、きょう、二日あそんで、それがため、すでに、かの穴蔵の仕事の十指にあまる連絡の線を切断。組織は、ふたたび收拾し能わぬほどの大混乱、火事よりも雷よりも、くらべものにならぬほどの一種凄烈せうれつのごったがえし。それらの光景は、私にとって、手にのせて見るよりも確実であつた。キャツプの裏切。逃走。そのうえに、海野三千雄のにせ者の一件が大手をひろげて立つていた。女に告白できるくらいなら、それができるたちの男であつたなら二十一歳、すでにこれほど傷だらけにならずにすんで居たに

ちがない。やがて女は、帯をほどいて、このけしの花模様の帯は、あたしのフレンドからの借りものゆえ、ここへこうかけて置こうと、よどみなく告白しながら、その帯をきちんと畳んで、背後の樹木に垂れかけ、私たちは、たいへんやわらかな、おっとりした気持ちで、おとなしく話し合い、それから、城ヶ島とおぼしきあたり、明滅する燈台の灯を眺めていました。どんな話をしたでしょうか。自分でも忘却してしまいました。が、私自身が、女に好かれて好かれて困るといふ嘘言を節度もなしに、だらだら並べて、この女難の系統は、私の祖父から発していて、祖父が若いとき、女の綱渡り

名人が、村にやって来て、三人の女綱渡りすべて、祖父がほおかぶ頬被りとつたら、その顔に見とれて、傘かた手にはつと掛声かけて、また祖父を見おろし、するする渡りかけては、すとんと墜落するので、一座のかしらから苦情が出て、はては村中の大けんかになったとき等、大嘘を物語つてやって、事実の祖父の赤黒く、全く気品のない羅漢ろかん様に似た四角の顔を思い出し、危く吹き出すところであつた。女は、信じて、それでは、私は、八人の女のひとにうらまれる訳なのね。(ひとりもいやしない) ああ、私は仕合せだ。『勝利者』と、うっとりつぶやいて星空を見あげていました。突然、

くすりがきいてきて、女は、ひゆう、ひゆう、と草笛の音に似た声を発して、くるしい、くるしい、と水のようなものを吐いて、岩のうえを這はいずりまわっていた様子で、私は、その吐瀉物としゃぶつをあとへ汚くのこして死ぬのは、なんとしても、心残りであつたから、マントの袖そでで拭いてまわつて、いつしか、私にも、葉がきいて、ぬらぬら濡れている岩の上を踏みぬめらかし踏みますべり、まつくろぐるの四足獣、のどに赤熱しやくねつの鉄火箸かなひばしを、五寸も六寸も突き通され、やがて、その鬼の鉄棒は胸に到り、腹にいたり、そのころには、もはや二つの動くむくろ、黒い四足獣がゆらゆらあるいた。折り

かさなつて岩からてんらく、ざぶと浪をかぶつて、はじめ引き寄せ、一瞬後は、お互いぐんと相手を蹴飛ばし、たちまち離れて、謂わば蚊よりも弱い声、『海野さあん。』私の名ではなかった。十年まえの師走、ちやうどいまごろの季節の出来ごとです。

——なるほど、なるほど、おい、竹や。ウオトカ。

——太宰さん。白ばくれちやいけな。私のこの話を、どう結んでくれるのです。これは勿論、あなたの身の上じゃない。みんな私の身の上だ。けれども、私はこれを発表するときに、雑誌社だって考えます。どこの鰯の頭か知れない男の告白よりは、ぱつとしな

いが、とにかく新進の小説家、太宰さんの、ざんげ話として広告したいところです。この私の苦心の創作を買って下さい。同文の予備役、なお、こちらに三冊ございます。その三冊とも、五十円は、安い。太宰さんおどろいたでしょう？ みんなウソ。おどかしてみたのさ。おどろいた？ ずっとまえに、君が私とお酒のみながら、この話、教えて呉れたじゃないか。きょう、日曜の雨、たいくつでたまらぬが、お金はなし、君のところへも行けず、天候の不満を君に向けて爆破、どうだ、すこしは、ぎよつとしたか。このぶんでは、僕も小説家になれそうだね。はじめの感想文は、あれは、

支那のブルジョア雑誌から盗んだものだが、岩の上の場面などは僕が書いた。息もつかせぬ名文章だったろう。これから、一時間、文士になろうかどうか思い迷つてみることにする。失礼。おからだ気をつけて。こんどの日曜日に行く。うちから林檎りんごが来ているが、取りに来て下さい。清水忠治。叔父上様。」

月日。

「謹啓。文学の道あせる事無用と確信致し居る者に候。そつろう空を見、雑念せず。陽と遊び、短慮せず。健康第一と愚考致し候。ゆるゆる御精進おたのみ申し上候。

昨日は又、創作、『ほっとした話』一篇、御惠送被下厚くだされ
く御礼申上候。来月号を飾らせていただきたく、お礼
如かくのごとくに此御座候。諷刺文芸編輯部、五郎、合掌。」

月日。

「お手紙さしあげます。べつに申しあげることもない
のでペンもしぶりますが読んでいただければ、うれし
いと思います。自分勝手なことで大へんはずかしく思
いますがおゆるしく下さい。御記憶がうすくなつて居
られると考えますが、二月頃、新宿のモナミで同人雑
誌『青い鞭むち』のことでおめにかかり、そしてその時の

わかれ方が非常に本意なく思われて、いつもすまなく感じていて、自分ひとりでわるびれた気持ちになっていきます。いつかお詫^わびの手紙を出そうと念じながらも、ひとりぎめの間のわるさの為^{ため}に、出しそびれて、何かのきっかけをと思い、あなたの『晩年』とかいうのが出たら、そのときのことにしようと最近心にきめていましたところ、今日、本屋であなたの一文を拝見して、無しようにかなしくなり、話しかけたくなりました。それでも、心のどこかで、びくびくして、こまります。あの夜、僕はとりみだし荒^{すさ}んだ歩調で階段を降りました。そしてそのとりみだし方も純粹でなかった

ようではずかしく、思いだしては、首をちぢめています。その夜、斎藤君はおもわせぶりであるとあなたにいわれたために心がうつろになり、さびしくなっていて、それだけですでおろおろして居たのです。僕が帰ることになったとき、先に払った同人費を還かえすからというとき、僕は心の中で、五円儲もうかった、と叫んだのです。そして、何か云われたのに、二円五十銭ずつ二回に払ったのですが、と答えたときの自分自身の見えすいた狡ずるさのために、自らをひくくしたはずかしさと棄鉢すてばちをおぼえました。そればかりでなく、五円儲かったということばは、その二三日前によんだ貴作『逆

行』の中にあることばがそのままにうかんだしろものに過ぎず、新宿駅のまえでぼんやりして居りました。あのはげしかった会合のことがらをはつきりと掴つかめもせず、自分の去就きよしゆうについてどうしたら下手へたをやらずにすむかを考えていたようでした。駅のまえで、しばらく、白犬のようにうろうろして、このまま下宿へ帰ろうかと考えましたが、これきりあなた達と別れてしまうのかと思われてさびしくなりました。今すぐ会場へ引返してみたところで、(充分の考慮もせず、ただ、足手まといになるつもりか、)と叱られるくらいがおちであろうと、永いことさまよいました。人に甘え、

世に甘え、自分にならないものを、何かしらん、かくし持つてあるが如くに見せかける、その思わせぶりを、人もあろうに、あなたに指さされ、かなしかつた。ああ、めめそめたことを書いて御免下さい。私は、その夜の五円を、極めて有効に、一点濁らず、使用いたしました。生涯の記念として、いまなお、その折のメモを失くさず、『青い鞭』のペエジの間にはさんで蔵して在るのです。三銭切手十枚、三十銭。ナンキンまめ南京豆、十銭。チエリイ、十銭。みのり、十五銭。つばき椿の切枝二本、十五銭。眼医者、八十銭。ゲエテとクライスト、プロレゴメナ、うたあんどん歌行燈、三冊、七十銭。かもにく鴨肉百目、七十銭。ねぎ、

五銭。サツポロ黒ビイル一本、三十五銭。シトロン、十五銭。銭湯、五銭。六年ぶりで、ゆたかでした。使
い切れず、ポケットには、まだ充分に。それから一年
ちかく、二三度会った太宰治のおもかげを忘じがたく、
こくめいに頭へ影をおとしている面接の記憶を、いと
おしみながら、何十回かの立読みをつづけて来た。一
言半句、ここにきざまれているような気がしていま
す。本屋から千葉の住所を諳記して来てかきとつて置
いたのが去年の八月である。それを役立てることが今
迄できなかったけれども。『太宰どん！ 白十字にて
まつ。クロダ。』大学の黒板にかかれてあったのは、先

日であつたらうか。『右者事務室に出頭すべし、津島修治。』文学部事務所にその掲示は久しくかけられてあつた。僕は太宰治を友人であるごとくに語り、そして、さびしいおもいをした。太宰治は芸術賞をもらわなかつた。僕は藤田大吉という人の作品を決して読ままいと心にちかつた。僕は、そんなに他人の文章を読まないけれども、道化の華、はなダス・ゲマイネ、理解できないのではなく、けれども満足がでなかつた。之これは、書くぞ、書くぞという気合と気魄きはくの小説である。本物の予告篇だと思つていた。そして今に本物があらわれるかと、思つていると、その日その日が晩年であつ

た、ということばがほんとうなのかとうたがわれて来た。健康をそこね、写真はすきとおってやせていた。そして、太宰治は有名になり、僕は近づけない気がした。僕には、道化の華が理解できないのだと思った。僕は太宰治に、ヴァイオリンのようなせつなさを感じるのは、そのリリースムに於てであった。太宰治の本質はそこにあるのだと、僕は思っている。それが間違いであるといわれても、僕はなかなか、この考えを捨てまいと思っている。リリースムの野を出でて、いばらに裂さかれた傷口に布をあてずに、あらわに、陽にさらしている、痛々しさを感じてならない。二月の事件

の日、女の寝巻について語っていたと小説にかかれて
いるけれども、青年将校たちと同じような壮烈なもの
を、そういう筆者自身へ感じられてならない。それは、
うらやましきよりも、いたましきに胸がつまる。僕は、
何ごとも、どっちつかずにして来て、この二年間で法
科の課程を三分の一、それも不充分にしか卒業していな
い。しかも、他に、なにもできないのであった。そう
いった、アマツールの気持からは、ただ、太宰治の
くるしみを、肉体的に感じてくるばかりで、傍観者と
して呆然ぼうぜんとしてゐるばかりである。僕自身へ巣くう生
半可な態度は、おそらくいつまでもつづくことと思わ

れます。僕の健康は、人に思われてるほど、わるくはないと思うけれども、何事にも、本気になれない。二三日、何かへ本気になったならば、僕自身をほろぼしてしまいそうでならない。本気になれぬ。そういうことで、もちろん勿論、何事も出来る筈はないけれども、それで、ごく、満足しています。『ユーモアについて。』と題し、中学時代のあなたの演説を、ぼくは、中学校一の秀才というささやきと、それから、あなたの大人びたゼスチュア以外におもいだせないけれども、多くの人達は、太宰治をしらずに、青森中学校の先輩津島修治のうわさ噂をします。青森の新町の北谷の書店の前で、

高等学校の帽子をかぶっていたのへ、中学生がお辞儀した。あなたはやはり会釈えしやくを返したとき、こちらが知っているのに、むこうが知らないことはさびしいと思つたが、あなたに返礼されただけでそれでもいささか満足であつた。僕は、今年で大学を終らなければならぬけれども、出来るかどうかあやぶまれますけれども、卒業することにきめて居ります。文学といへばじつのあることは少しも出来るはずなく、風景や女のみにみとれてくらしています。『双葉』という少女雑誌で僕の皿絵という小説がおめにふれたとすればと汗するおもいがしました。(岩切) という人にあつて聞

きました。トラホームだの頸腺腫けいせんしゅだのX彎曲わんきょくだの、
というくだりは、あなたに、いい、といわれたばかり
に、どこへでも持って歩いていたのです。『新ロマン
派』で追記風にある同人雑誌（名だかくない）のある
人をほめていたことばを見て、ねたましく思ったこと
もあります。何をかいたか、自信がありません。これ
だけでもうヘトヘトです。毎日毎日つかれている。何
ごとをするのでもなく。

ほとんど休んでばかり居れば日曜もたのしくなく、
夜ねても、一日がおわったといういいいではなくて、
あしたがあるというつかれを覚えていきます。健康をね

がって終日をくらす。今は、弱いというだけで病気はありません。老人のごとき皮膚をあわれみ、夜裸身に牛乳をあびる。青春を得るみちなきかと。非常に、失礼な手紙だと思えます。文体もあやふやで申しわけありません。でもほつとしています。明日の朝になれば、だせなくなるといけませんから、すぐだします。おひまのときに、おたより、いただけたらと思います。おからだお大事にねがいます。斎藤武夫拜。太宰治様。」

「御手紙拝見。お金の件、お願いに背そむいて申し訳ないが、とても急には出来ない。実は昨年、県会議員選挙に立候補してお蔭で借金かなりへ毎月可成かなりとられるので閉口。

選挙のとき小泉邦録君から五十円送つて貰つた。これだけでも早くお返ししたいと思ひなが乍ら未だいまにお返し出来ずにいる始末。五十円位の金が出来ないのは何んともはずか羞しいがさりとして、その辺を借金に廻るのは小生には、ちよつと出来ない。貴兄が小生の友情を信じて寄せた申越しに対し重ね重ねすまない。しかし出来な
いことをねちねちしているのも嫌だから早速さつそくこの手紙を書いた次第。悪く思わないでくれ。小生昨今、文学にしばらく遠ざかっているので、貴兄の活躍ぶりも詳しくは接していないが、貴兄の力には期待して居りますので必ずや相当以上の活動をしていることと思つて

居ります。返す返す濟まないが、右の事情を御賢察の
うえ御寛恕かんじよ下さい。しかし貴兄から、こう頼まれたが、
工面出来ないかと友達連に相談をかけても良いものな
らばまた可能性の生れて来る余地あるやも知れぬが、
これは貴兄に対する礼儀でないと思うので……右とり
急ぎ。辻田吉太郎。太宰兄。」

「手紙など書き、もの言わんとすれば君ぞありぬる。
ああ、よき友よ。家内にせんには、ちと、ま心たらわ
ず、愛人とせんには縹きりよう織おわるく、妻妾さいしやうとなさんとすれ
ば、もの腰粗雑あせいにして鴉声あせいなり。ああ、不足なり。不
足なり。月よ。汝、天地の美人よ。月やはものを思わ

する。吉田潔。」

月日。

「太宰治さん。再々悪筆をお目にかける失礼、お許し下さいまし。一つには私たちの同人雑誌『春服』が、目茶苦茶になりかかった、わびしさから、二つには、ぼく自身のステールネスから、最後に、あなたがぼく如きものに好意をお持ち下され居る由、昨晚の松村と云う『春服』同人の手紙が伝えてくれたので、加うるに性来の凶々しさずうずうを以て、御迷惑を省みず、狎書こうしよを差し上げる次第です。友人の松村と言う男が、塩田カ

ジョー、関タツチイ、大庄司清喜、この三人そろって船橋のお宅へお邪魔した際の拙作に関するあなたの御意見、あとでその三人から又聞きしたのを、そのまま私へ知らせてよこしました。亦、^{また}『新ロマン派』十二月号にも拙作に関する感想をお洩しもらになったこと、『新潮』一月号掲載の貴作中、一少女に『春服』を携えさせたこと等、あなたの御心づかいを伝えてくれました。早速、今日、街の五六軒の本屋をまわって、二誌を探したのですが、『新潮』はどこでも売切れてばかりいまして、『新ロマン派』は来ていない模様でした。ぼくはあなたに御礼を書くのではないのです。御礼だけか

いて、済まして居られる身分になれたら、それはさすがに嬉しいことです。が、きいて頂きたいことがあるのだ、相談にのって頂きたい、力になって貰いたい、と手前勝手な台辞せりふばかりならべるのは、なんとも恥しい話です。あなたはカジョーに、ぼくの、経歴人物について、きいて下さったかも知れません。が、カジョーは多分、あいつは宣伝の好きな男だから……けれども、これはカジョーへの悪意ではありません。ぼくの自己弁解です。ぼくは幼年時、身体が弱くてジフテリアや赤痢で二三度昏絶こんぜつ致しました。八つのとき『毛谷村六助』を買って貰ったのが、文学青年になりそめです。

親爺おやじはその頃めかけ妾めかけを持つていたようです。いまぼくの愛しているお袋は男に脅迫されて箱根かけおちに駈落かけおちしました。お袋は新子と名を改めて復帰致しました。ぼくの物心ついた頃、親爺は貧乏官吏から一先ず息をつけていたのですが、肺病になり、一家を挙げて鎌倉に移りました。父はその昔、一世を驚倒きょうとうせしめた、歴史家です。二十四歳にして新聞社長になり、株ですって、陋巷ろうこうに史書をあさり、ペン一本の生活もしました。小説も書いたようです。大町桂月けいげつ、福本日南等と交友あり、桂月を罵ののしつて、仙をてらう、と云いつつ、おのれも某伯、某男、某子等の知遇を受け、熱烈な皇室中心主義者、

いっごくく官吏、孤高けんかい狷介、読書、追及、倦うまざる史家、癩癩持かんしやくもちの父親として一生を終りました。十三歳の時です。その二年前、小学六年の時、ぼくの受持教師は鎌倉大仏殿の坊主でした。その影響で、ぼくは別荘の坊ちゃんとしての我儘わがままなしたいほうだいを止めて、執偏奇的な宗教家、神秘家になりました。ぼくは現実に神をみたのです。一方、豆本熱は病こうこうに入つて、蒐集しゅうしゅうした長篇講談はぼくの背を越しました。作文の時間には指名されて朗読しました。『新聞』と云う題で夕刊売の話を書き級中を泣かせました。俳句を地方新聞にも出されました。ぼくは幼ないジレットタン

ト同志で廻覧雑誌を作りました。当時、歌人を志していた高校生の兄が大学に入る為ため帰省し、ぼくの美文的フォルマリズムの非を説いて、子規の『竹の里歌話』をすすめ、『赤い鳥』に自由詩を書かせました。当時作る所の『波』一篇は、白秋氏はくしゅうに激賞され、後選ばれて、アルス社『日本児童詩集』にのりました。父が死んだ年、兄は某中学校に教べんを取りました。父の死は肺病の為でもあったのですが、震災で土佐国から連れてきた祖父を死なし、又祖父を連れてくる際の、口論の為、叔父の首をくくらし、また叔父の死の一因であったいとこ従弟の狂気等も原因して居たかも知れません。加え

て、兄のソシヤリストになった心痛もあつたでしょう。事実兄は、ぼくを中学の寄宿舎に置くと、一家を連れて上京、自分は××組合の書記長になり、学校にストライキを起しくびになり、お袋達が鎌倉に逃げかえつた後も、豚箱から、インテリに活動しました。同志の一人はうちに来て、寄宿から帰つたぼくと姉を兄貴への心服の上に感化しました。三・一五が起り、兄は転向、結婚、嫁と母の仲悪るく、兄夫婦はぼく達を置いて東京で暮していました。人道主義的なマルキストであり、感傷的な文学少年、数学の出来なかつたぼくは、ひどい自瀆じとくの為もあつたのでしよう、学校に友達なく、

全く一人で、姉、近所のW大生、小学時代の親友、兄夫婦も加えて、プリント雑誌『素描』を二年続けました。兄の運動の為、父の財産はなくなり、鎌倉の別荘は人に貸し、一家は東京に舞い戻り、兄夫婦も一緒になりました。中学の終りからテニスを始めていたぼくは、テニスのおかげで一夜に二寸ずつ伸びる思いで、長身、肥満、W高等学院、自瀆の一年を消費した後、W大学ボート部に入りました。一年後ぼくはレギュラーになり、二年後、第十回オリンピック選手としてアメリカに行きました。当時二十歳、六尺、十九貫五百、紅顔の少年であります。ボートは大変下手へたでした。

先輩ばかりでちいさくなっていました。往復の船中の恋愛、帰ってきたぼくは歓迎会づくめの有頂天さのあまり、多少神経衰弱だったのです。ぼくが帰国したとき、前年義姉を失った兄は、家に帰り、コムニユスト、党資金局の一員でした。あにを熱愛していたぼくは、マルキシズムの理論的影響失せなかったぼくは、直に共鳴して、鎌倉の別荘を売ったぼくの学費を盗みだして兄に渡し、自分も学内にR・Sを作りました。関タツチイはそのメンバーであり、彼の下宿はアジトでした。その頃、自殺を企て、実行もした元氣のない塩田カジョーと知り合ったのです。タツチイがへまを

してつかまりました。タツチイは頑張がんばってくれたのでしたが、ぼくは、その前から家を飛びだしもぐつていた兄にならつて、殆ほとんど狂気しかかっているヒステリーの母をみすてて、ぼくも一週間、逃げ歩きました。家の様子をみにきたぼくは姉に攔りました。学資がなく学校も止めさせられ、ぼくは義兄の世話で月給十八円で或る写真工場につとめに出ました。母と共に二間の長屋に住んで。——ぼくは直ちに職場に組織を作り、キャップとなり、仕事を終えると、街で上の線と逢いきつ茶店で、顔をこわばらせて、秘密書類を交換しました。その内、僅わずか四五カ月。間もなく、プロバカー

トル事件が起り、逃げてきて転向し、再び経済記者に返った兄の働きで、ぼくも学校に戻れました。転向後だったので、兄は二カ月、ぼくは大した事もなかったので半日、豚箱に置かれました。職場にいた頃、機関雑誌に僕はミューレンの焼き直し童話や、片岡鉄兵氏ばりのプロレタリア小説を書いていました。十銭で買った『カラマゾフの兄弟』の感激もありましたろう。貧乏大学生の話、殊ことに嫁を貰ってからの兄との遠慮は、ぼくにまた幼年時からの理想、小説家を希望させたのです。最初の一年はぼくは無我夢中で訳の分らぬ小説を書き、投書しました。急にスポーツをやめた

故か、人の顔をみると涙がでる、生つばがわく、少しほてる。からだは松葉で一面に痛がゆくなる。『芸術博士』に応募して落ちた時など帯を首にまきつけました。ドストエフスキイ流行直前、彼にこつて、タッチイを臭い文学理論でなやまし、そのほかの友人すべてをもひんしゆくさせたことと思います。兄の新妻の弟、山口定雄がワセダ独文で『鼻』という同人雑誌を出していましたので、彼に頼み、鼻の一員にして貰い、一作を載せたのが、昨年暮なのです。『鼻』に嫌気がさいやきしていた山口を誘い、彼の親友、岡田と大体の計画をきめてから、ぼくは先ず神崎、森の同感を得、次に関

タツチイを口説くどきに小日向に上りました。タツチイを強引に加入させると、カジョー、神戸がついてきてくれました。かくして、タツチイの命名になる『春服』が生まれました。タツチイは顔がひろくて、山村、カツ西、豊野を加え、カジョーもまた努力してくれて、伊牟田氏を入れてくれました。カジョーとは段々仲が良くなり、ぼくの臭さも彼、許してくれてきましたようです。『春服』創刊から二号にかけて、ぼくは昨年暮から今年の三月頃まで就職に狂奔きようほんしました。幸い、ぼくは母方の祖父の友人の世話で現在の会社に入れて貰もらいました。その頃から益々ますます兄と仲が悪く、蔵書一切を

売って旅に出ようと決心したりしました。兄はぼくが文学をやめるのを極度に軽べつします。兄貴に食わして貰うのは卒業後不可能です。母の悲歎を思えば神崎の如き文学青年の生活も出来ないし、一つには会社員と云う生活もしてみたかったです。会社に入つて一月半、君は肉体が良いから、朝鮮か満洲に行つて貰いたいと頼まれました。母や兄と一緒に窮屈なる生活に嫌気がさし、また新しい生活もしたさに、ぼくは朝鮮に來ました。満洲より朝鮮が小説になる氣もしたのですが、これは会社員になつたのと同様、色々な自分の意見からより、色々な必然の為でしょう。『青年の思

想はおのれの行動の弁解に過ぎぬ。』H先生の言葉みたいなものです。ぼくはここ迄を昨夜、女郎にシヨールを買えないと云い訳に行き、ちよいの間を歩き、皆さんの借金を三円払ってやり、正月に連れだして、やる約束を迫せがまれ……所で、今月は師走です。洋服屋がきて虎の子の十円を持って行きました。未だ一円残っています。これがこれで散髪屋に行き、——後五十銭残りですが、これもいっそ費つかって、宵越よいこしのぜにア持たね工、クリスマスを迎えようかと愚考しています。ぼくはここ迄昨夜二時帰宅後、五時まで書きました。今、同じ部屋に居る会社の給仕君と床屋に行つて来ました。加

藤咄堂とつどう氏のラジオを聞いてきました。帰りに菓子四十
錢、ピジョン一箱で、完全に文無しになりました。今
シエストフ『自明の超克』『虚無の創造』を読んでいま
す。彼は云います、『一般に伝記というものは何でも
語っているが、只我々にとつて重要なことは除外して
いるものだ。』ぼくは前の饒舌じょうぜつを読み返して、イヤに
なる。差し上げまいかとも思つたのですが、一遍書い
たものは、もう僕と異ちがつたものですから、虚飾にみち
た自家広告も愛嬌あいぎょうだと思ひ、続けて自己嫌悪を連ね
ようと考えたのですが、シエストフで、誤魔化ごまかして置
きます。御免なさい。さて、現在のぼくの生活ですが、

会社は朝の九時半から六、七時頃迄です。ぼくの仕事は机上事務もありますが、本来は外交員です。自動車屋、会社の購買、商店等をまわり、一種の御用聞きをつとめるのです。大抵は鼻先で追い返されますし、ヘイヘイもみ手で行かねばならないので、意気地ない話ですが、イヤでたまりません。それだけならいいんですが、地方の出張所にいる連中、夫婦ものばかりですし、こじゆうと小姑根性というのか、蔭口、皮肉、殊に自分のお得意先をとられたくないようで、雑用ばかりさせるし、悪口ついでにうんとならべると、女の腐ったような、本社の御機嫌とりに忙しい、くびの心配ばかりしてい

る。他人の月給をそねみ、生活を批評し、自分の不平、例えば出張旅費の計算で陰で悪口の云い合い、出張成金なりきんめとか、奥さんがかおを歪ゆがめて、何々さんは出張ばかりで、——うちなんか三日の出張で三十円ためてかえりましたよ。すると一方の奥さんは、うちは出張しても、まア、それだけ下の人達にするからよ。けれども主任さんは、二等旅費で三等にばかり乗るのですよ。けちねエ……。然しかし、奥さん出張すると、靴は痛む洋服は切れる、Yシャツは汚れる……随分煩うるさいのです。殊に小人数ですから家族的気分でないとかいいながら、それだけ競争もはげしく、ぼくなど御意見を

伺わされに四六時中、ですから——それに商売の性質から客の接待、休日、日曜出勤、居残り等多く、勉強する閑ひまはありません。気をつかうのでつかれます。月給六十五円、それと加俸五割で計九十七円五十銭の給金です。金というものの正体不明で相手に出来ないの
で、損ばかりしています。もう大分借金が出来ました。もう他人の悪口を云い、他人に同情する年でもありません。すまい、止めます。もう給仕君床に入りました。ぼくに盛んに英語を聞くので閉口です。所でぼくは語学がなにも出来ないのです。所でぼくも床に入って書いています。給仕君煩さいので、寝てからにしましょう。

ラジオのアナウンスみたいな手紙の書き方をお許し下さい。ぼくにはこの方が純粹なような気がするのです。亦、シエストフを写します、^{また}『チエホフの作品の獨創性や意義はそこにある。例えば喜劇「かもめ」を挙げよう。そこではあらゆる文学上の原理に反して、作品の基礎をなすものは、諸々の情熱の機構でも、出来事の必然的な継続でもなく、裸形にされた純粹の偶然というものなのである。此の喜劇を讀んでゆくと、秩序も構図もなく寄せ集められた「雑多な事実」に満ちている新聞にでも眼を通してゆくような印象を受ける。ここに支配しているものは偶然であり、偶然があらゆる

一般的な概念に抗して戦っているのである。』これを
写しながら、給仕君におとぎばなし、紫式部、清少納
言、日本靈異記とせがまれ、話しているうち、彼氏恐
怖のあまり、齒をがつ、がつ、がつ、三度、音たてて
鳴らしてふるえました。太宰さん。もう、ねましよう。
にやにや薄笑いしていい加減の合槌あいつちをうつのは、やめ
て下さい。——なあんてね。きようは会社に出勤、忘
年会とか、いちいち社員から会費を集めている。酒盛
り。ぼくは酒ぐせ悪いとの理由で、禁酒を命じられ、
つまらないので、三時間位、白い壁の天井を眺めなが
ら、皆の馬鹿話を聞いていました。それから御得意に

挨拶に行き、会員、主任のうちに呼ばれて御馳走になり、カルタをとり、いま帰って、これを書いているのが夜十時です。気がつかれて、手紙を書くのがイヤです。簡単にあとかきます。会社を二月休んだ原因は、或る事から、酔の上、職人九人を相手にして、喧嘩をし、ぼくは、十月二十九日、腕を剃刀かみそりでわられたのです。その傷が丹毒になり、二月入院しました。喧嘩しながら居眠るほど、酔っていた男を正気の相手が刃物で、而もしか多人数で切ったのですから、ぼくの運がわるく、而も丹毒で苦しみ、病院費の為、……おやじの残したいまは只一軒のうちの高利貸に抵当ていとうにして母は、

兄と争い乍ら金を送ってくれました。会社は病気ではなく私傷による事故だからといって、十一月は給料をくれませんでした。また会社の人達は、ぼくをまるで無頼漢扱いにして皮肉をいう。まア止めましよう。いつそ、桜の花の刺青いれずみをしようかと思つて居ります。私は子供じゃないんだ。所で、あなたに手紙を書きたかつたのは、ぼくはもう文学を止めたいとおもう。それもなんら思想上のものではなしに、単に生活上の不便からです。京城けいじょうにいるとか会社員をしている事は、いままで、なんら、悪条件と感ぜませんでした。こんどの事件があつてからは、急にイヤになつたのです。

今日でも会社にでると殆んど、もう自分の時間がありません。負傷前は五六時間睡眠平均、または時に徹夜で読書、著述、（いやはや）また会社で小品みたいなものは書いたりしましたが、これからはイヤです。太宰さん、ぼくは東京に帰って、文学青年の生活をしてみたいのです。会社員生活をしているから社会がみえたり、心境が広くなるわけではなく、却かえって月給日と上役の顔以外にはなんにもみえません。大学でつめこんだ少量の経済学も忘れてしまいました。勉強のできなくなる事、前から余り好きませんが、一層ひどいです。ぼくは東京で文学で生活するか、さもなければ死ぬか。

例えば鏡花氏きやうかが紅葉山人こうようざんじんの書生であつたような形式をとるか、ドストエフスキイ式に水と米、ベリンスキイが現われるまで待つか、なにかしたいと思つています。然し、ぼくは汚きたならしい野郎ですから、東京に帰つてどんなに墮ちても、かまいませんが、おふくろが、——たまたらんです。と、いつて、こつちの空気もたまたらんです。恐らく、ぼくの願ねがいは自利的な支離滅裂な、ぜいたくなものでしよう。而し、いまのまま一月も同じ商人暮しがつづいたら、ぼくは自殺するか、文学をやめるか、のほかにない気がするのです。或あるいは続けるかも知れません。続けはしたい——然し、今書いて

いるのは、我慢できない気持です。息がつまりそうです。つまつた息を風船に入れて、青空をとびまわれ、あきらめよ、わが心とは思います。然し、ぼくはなんとか生活をかえたい。これに対するあなたの御意見をききたく思います。ぼくなんて駄目です。ぼくは東京に帰っても、とても文学だけでは食つて行けない。いつそ、チンドン屋になったり、ルンペンになれば、生活経験が豊富になっていいかも知れません。が、おふくろが嫁さんの候補の写真を四枚も送ってきてますからね。いまは『春服』をぼくの足場にする希望もない。十月頃送った百枚位の小説はどうなっておるか。

いつそ、破ったほうがいい。いつそ、懸賞募集を狙い
ましようか。黙ってる方がかしこいでしょう。然し、
太宰治さん、できたら、ぼくに激励のお手紙を下さい。
もう四日出勤して五日も経てば、ぼくは腐りの絶頂で
しよう。今晚は手紙を書くのがイヤです。明晩明後日
と益々イヤになるでしょう。虫の好い事を云いつづけ
に、思いきり云います。一つ叱しかつて下さい。ああ。ぼ
くに東京に帰ってこい、といつて下さい。嘘！ ぼく
をぼくの好きな作家、尾崎士郎、横光利一、小林秀雄
氏に紹介して下さい。嘘！ ぼくは、今月中から、自
伝を覚えたままに書いて行きたいと思うのです。が、

『春服』が目茶苦茶なので悲観しているのです。『春服』が立ち直る迄なりと、一つ、月々五十枚位載せて貰える、あなたの知っている同人雑誌に紹介してくれませんか。同人費は払います。余計な事を！ 書きためて、懸賞当選を狙う手もあるのですが、あれには運が多い気がしてイヤです。それに、こんな汚ない字の原稿なんか読んでほくれますまい。また薄志弱行のぼくは活字にならぬ作品がどんどん殖ふえて行くとどうしても我慢できず、最初のから破ってしまうので——嘘、嘘。なんでもいいんです。この手紙をここ迄読んで下さったなら、それだけでも、ありがたい。御手紙、下さい。

そしたらまた、書き直します。この手紙は破って捨てて下さい。どうぞどうぞ許して下さい。これとそっくり同文の手紙、六通書いて六人の作家へ送った。なんといおうと、あなたは御自分の世界をもっている作家です。はつきり云うと、生意気で、ぼくは薄馬鹿ですね。あなたの世界をぼくは熱愛できないのです。あなたが利巧だとは思わない。然し、あなたは近代インテリゲンチヤ、不安の相貌そうぼうを具そなえている。余りでたらめは書きすまい。あなたは黄表紙の作者でもあれば、ユリイカの著者でもある。『殴なぐられる彼奴あいつ』とはあなたにとって薄笑いにすぎない。あなたがあやつる人生

切り紙細工は大南北なんぼくのものの大芝居の如く血をしたた
らせている。あまり、煩うるさい無駄口はききますまい。
ヴァレリイが俗っぽくみえるのはあなたの『逆行』『ダ
ス・ゲマイネ』読後感でした。然しかし、ここには近代青
年の『失われたる青春に関する一片の抒情、吾々の実
在環境の亡霊に関する、自己証明』があります。然し、
ぼくは薄暗く、荒れ果てた広い草原です。ここかしこ
日は照つてはいます。緑色に生々と、が、なかに
は菁せいせい々たる雑草が、乱雑に生えています。どつから刈
りこんでいいか、ぼくは無茶苦茶に足の向いた所から
分け入り、歩けた所だけ歩いて、報告する——てやが

んだい。ぼくは薄野呂うすのろです。そんなんじゃあない。然し、ぼくは野蛮でたくましくありたいのです。現在ぼくの熱愛している世界はどの作家にもありません。ドストエフスキイが一番好きです。ぼくのこのみの平凡さを軽べつしないで下さい。ぼくは今年こそ、なにか書きたいと思っています。だが、小説に、人生に、なんの意義がありません。意義なんてない。飯を食うように、小説を書く。あんなに、実務的精神をにくんだシエストフでさえ、全集を残している。だから、力んでもいいでしょう。僕は誰にでも、有名な人から手紙を貰うと、斯こんな訳の分らぬ凶ずうずう々しい宣伝文を書く

癖があるのでしよう。いや、この前、北川冬彦氏から
五六行の葉書を貰った時だけです。然し、ほんとうは、
生れてはじめて、こんな長い手紙かいた。もう、ねま
しよう。シエストフでも読みませう。どう
かくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくど
うか、どうか、御手紙下さい。でないと、ぼくはつま
んないんです。この甘ったれ根性め。ぼくはこの手紙
をかいたぼくを余り好きません。あなたはどうです
か？ 僕の少年時の貧しき自慢に、これをつけ加えて
下さい。ぼくは少年時十三四頃、絵が大変、下手でし
たが、帝展の深沢省三氏（紅子氏の夫）が好いてくれ

まして、美術に入れとすすめたりしました。歌がうまかった、詩も得意だ——それこそバカメですね。こう言うのが、——カジョーはきれいなんです。ぼくも人の自慢は、きれいですが、自分のはまア書きました。御免なさい。不愉快にならないで下さい——いや、第一そんな、不愉快になるなんてわけがわからぬ。私は下劣の少年である。けれども、——否！ やつぱり下劣である。むりのオネガイ。手紙くれやがれと。サラバ、サラバ、鶴首^{かくしゆ}。待て！ あくびをした奴がある。しかも見よ。あ、あ、あ、と傍若無人、細長き両の腕を天井やぶれよ、とばかりに突き出して、しかもその

口の大きさ、齒の白さ、さながら、馬の顔であつた。われに策あり、太宰治さん。自分について、色んなことを書きたくなりました。もう二、三十ペエジ読んで下されば幸甚こうじんです。第一、ぼくが全く無意義な存在であること、例え、マルクスが商事会社——ブローカー——広告業——外交販売員が社会にとって有害であると説かぬにしろ、ぼくは自分の商売が憎らしいのに決つています。曾かつて、主任から、個性を殺せと説教されました。そうして個性は主任を殺せと説教しました。集金に行つてコップ酒を無理強むりじいにするトラック屋の親爺などに逢えば面白いが、机の前に冷然として

いる、どじょう髭ひげの御役人に向つて、『今日は、御用は
ありませんか。』『ない。』『へい、ではまたどうぞ。』と
か、『商人は外で待つてろ。』とか、『一厘りん』の負け合
いで、御百度を踏んで二、三十円の註文を貰つたり……。
否、愚痴はいいますまい。つらつら、考えてみますと
好き嫌いが先に定つて、理窟りくつが後になる事実ほど恐し
く、嫌なものはありません。お好き？ お嫌い？ そ
れで一瞬は過ぎて、今は嫌いなのです。だから世の中
の言葉はひとの感情をあやつるに過ぎない気がします。
ぼくにもそろそろマスクが必要な気がします。メリメ
のマスクが一番好いでしょう。ボクはもう他人に向つ

て好き、嫌いを云々うんぬんしますまい。好きだから好きと、云ったのに、嫌いになつたら、嫌いになつたと云えない。ぼくはある娘に、そんな責任が出来て、嫌いになつたのに、別れようと云えず、困っています。嫌いでも好きになりたいと努力するのは不可能です。ぼくは嫌いなまま愛さなければ不可いけないのでしょうか。なんにも云いたくない。ぼくは余り多くの人々を憎んでいます。あ、ああ君も、お前も、キサマも、俺がこんなに苦しんでいるのにシヤアシヤアとして生きていやがる。」

「近頃の君の葉書に一つとして見るべきものがない。

非常に懦弱になつて巧言令色である。少からず遺憾に思っている。吉田生。」

月日。

「一言。(一行あき。)僕は、僕もバイロンに化け損そこねた一匹の泥狐どろぎつねであることを、教えられ、化けていることに嫌気が出て、恋の相手に絶交状を書いた。自分の生活は、すべて嘘うそであり、偽にせであり、もう、何ごとも信ぜず、絶望の(銀行も、よす。)穴に落ち入る。きょうより以後、あなたの文学をみとめない。さようなら。御写真ください。道化の華は人殺し文学であるか。

（銀行はよさない。けれども……）いや、ざっと、ウォーミングアップ。太宰さん、どうやらひっかかったらしい。手ごたえあり。私に興味を感じたら、お仕舞しままでお読み下さい。僕はまだ二十歳の少年なので、貴重なお時間を割さいて戴いたくのもの、心苦しいまでに有難く存じます。（この私の、いのちこめたる誠実の言葉をさえ、鼻で笑つたら、貴下を、ほんとうに、刺し殺そうと思つています。ああ、ぼんくらな事を言つた。）まず、僕が、どの程度に少年であるか、自己紹介させて下さい。十五、六歳の頃、佐藤春夫先生と、芥川龍之介先生に心酔しました。十七歳の頃、マルクスとレエニンに心酔

しました。（命を賭して。）……ところが、十八歳になると、また『芥川』に逆戻りして、辻潤氏に心酔しました。（太宰つて、なあんて張り合いのない野郎だろう。聞いているのか、ダルマ、こちらむけ、われも淋しい秋の暮、とは如何？ お助け下さい。くず籠へ投げこまないで下さい。せいぜい面白くかきますから。）『芥川』を透して、アナトール・フランス（敬語は不用でしよう）を、ボードレエルを、E・A・ポーを、愛読しました。それから文学を留守にして、幻燈の街に出かけたり、とやかくやして、現在の僕になりました。僕は文学をやるのに、語学の必要を感じつつ、外国語

はさておき、日本語の勉強をすらやらないで、（面白くない？　もう少しですから、辛抱たのむ。）便便として過してます。自分の生活を盲動だと思って、然し、人生そのものが盲動さ、と自問自答しています。（秋の夜や、自問自答の気の弱り。これは二百年まえの翁の句です。）二十歳の少年の分際で、これはあまり諦めがよすぎるかも知れません。……シエストフ的不安とは何であるか、僕は知りません。ジツドは『狭き門』を読んだ切りで、純情な青年の恋物語であり、シンセリテイの尊さを感じたくらいで、……とにかく、浅学ひさい菲才の僕であります。これで失礼申します。私は、と

んでもない無礼をいたしました。私の身のほどを、只今、はつと知りました。候文そつうぶんなら、いくらでもなんでも。他人からの借衣なら、たとい五つ紋もんつの紋附きでも、すまして着て居られる。あれですね。それでは、唄わせて、（ふびんなことを言うなよ。）いや、書かせていただきます。拜啓。小生儀、異性の一友人にすすめられ、『めくら草紙』を読み、それから『ダス・ゲマ イネ』を読み、たちどころに、太宰治フ、アンに相成あいなり候そつうものにして、これは、ファン・レターと御承知くだされたく被下度候。『新ロマン派』も十月号より購読致し、『もの想う葦』を読ませて戴き居候。知性の極というもの

は、……の馬場の言葉に、小生……いや、何も言うこととは無^{これなき}之候。映画ファンならば、この辺でプロマイドサインを願^{ぞんじそつら}う可きと存候え共、そして小生も何か太宰治さま、よりの『サイン』に似たもの、欲しとは存じ候え共、いけませんでしょうか。御伺い申上候。かかる原稿用紙様の手紙にて、礼を失^{しんしゃ}し候段、甚謝仕候。敬具。十二月二十二日。太宰治様。わが名は、なでしことやら、夕顔とやら、あざみとやら。追^{ついで}伸、この手紙に、僕は、言い足りない、或^{ある}は言い過ぎた、ことの自己嫌悪を感じ、『ダス・ゲマイネ』のうちの言葉、『しどろもどろの看板』を感じる。(いや、ばかなことを

言った。太宰さん、これは、だめです。だいいち私に、異性の友人など、いつできたのだろう。全部ウソです。サインなんか不要です。私は、貴下の、——いや、むずかしくなって来ました。御返事かならず不要です。そんなもの、いやです。おかしくって。私たちの作家が出たというのは、うれしいことです。苦しくとも、生きて下さい。あなたのうしろには、ものが言えない自己喪失の亡者が、十万、うようよして居ります。日本文学史に、私たちの選手を出し得たということは、うれしい。雲霞うんかのごときわれわれに、表現を与えて呉れた作家の出現をよろこぶ者でございます。(涙が出

て、出て、しようがない）私たち、十万の青年、実社会に出て、果して生きとおせるか否か、厳肅の實驗が、貴下の一身に於いて、黙々と行われて居ります。以上、書いたことで、私は、まだ少年の域を脱せず、『高所の空氣、強い空氣』である、あなたに、手紙を書いたり、逢ったりすることに依りて、『凍える危険』を感じる者である。まことに敬畏する態度で、私は、この手紙一本きりで、あなたから逃げ出す。めくら蜘蛛、願わくば、小雀こすずめに対して、寛大であられんことを。勿論お作は、誰よりも熱心に愛読します心算つもり、もう一言。――君に黄昏たそがれが来はじめたのだ……君は稲妻いなずまを弄もてあそんだ。

あまり深く太陽を見つめすぎた。それではたまらない……（一行あき。）めくら草紙の作者に、この言葉あてはまるや否や、——ストリンドベルグの『ダマスクスへ』よりの言葉である。と、ああ、気づいた書き方をして了しまった。もう、これ以上、書かないけれども、太宰治様。僕は、あなたの処へ飛んで行って暗いところで話し度たい。改造にあなたが書けば改造を買い、中公にあなたが書けば中公をかう。そして、わざと三円の借金をかえさざる。頓首とんしゅ。私は女です。」

「拝復。君ガ自重ト自愛トヲ祈ル。高邁こうまいノ精神ヲ喚起シ兄ガ天稟てんびんノ才能ヲ完成スルハ君ガ天ト人トヨリ賦与

サレタル天職ナルヲ自覚サレヨ。徒いたずラニ夢ニ悲泣スル勿なかレ。努メテ嚴肅ナル五十枚ヲ完成サレヨ。金五百円ハヤガテ君ガモノタルベシトゾ。八拾円ニテ、マント新調、二百円ニテ衣服ト袴はかまト白足袋たびト一揃イ御新調ノ由、二百八拾円ノ豪華版ノ御慶客。早朝、門ニ立チテ才待チ申シテイマス。太宰治様。深沢太郎。」

「謹啓。其の後御無沙汰いたして居りますが、御健勝ですか。御伺い申しあげます。二三日前から太宰君に原稿料として二十円を送るように、たびたびハガキや電報を貰っているのですが、社の稿料は六円五十銭（二枚半）しかあげられず、小生ただいま、金がなく漸ようやく

十円だけ友人に本日借りることができました。四度も書き直してくれて、お気の毒千万なのですが計十五円だけお送りいたします。おおみそかを控え、それでも平気でばっぱ使つてしまいますゆえ、あなたの方で保管、適当にお渡し下さいまし。もつと送つてあげたく思いましたが、僕もいっぱいの生活でどうにもできません。麴町区内幸町武蔵野新聞社文芸部、長沢伝六。太宰治様、令閨様^{れいけい}。」

月日。

「師走厳冬の夜半、はね起きて、しるせる。一、私は、

下劣でない。二、私は、けれども、独りひとで創った。三、誰か見ている。四、『あたしも、すっかり貧乏してしまつて、ね。』五、こんな筈ではなかつた。六、蛇身じゃしんぎよひめ清姫。七、『おまえをちらと見たのが不幸のはじめ。』八、いまごろ太宰、寝てか起きてか。九、『あたら、才能を！』十、筋骨質。十一、かんなん汝を玉にせむ。（そろそろぞろぞろ、思念の行列、千紫万紅百面億態）一箇条つかんでノオトしている間に三十倍四十倍、百千ほども言葉を逃がす。S。」

月日。

「前略。その後いよいよ御静養のことと思ひ安心して
おりましたところ、風のたよりにきけば貴兄このごろ
薬品注射によつて束つかの間の安穩あんのんを願つていらるる由。
甚はなはだもつていかがわしきことと思ひます。薬品注射
の末おそろしさに關しては、貴兄すでに御存じ寄りの
ことと思ひますので、今はくり返し申しません。しか
しそれは恋人を思ひあきらめるがごとき大発心にて、
どうか思ひあきらめて下さるよう切望いたします。仏
典に申す『勇猛精進』とはこのあたりの決心をうなが
す意味の言葉かと思ひます。実は参上して申述べ度き
ところでありますが、貴兄も一家の主人で子供ではな

し、手紙で申してもききわけて頂けると信じ手紙で申
します。どこかあたたか温い土地か温泉に行つて静かに思索
してはいかがでしょう。青森の兄さんとも相談して、
よろしくとりはからわれるよう老婆心ろわぼしんまでに申し上げ
ます。或いは最早もほや温泉行きの手筈てはずもついていること
かと思ひます。温泉に引越したら御様子願ひ上げます。
北沢君なんかといっしょに訪ね、小生もその附近の宿
にしばらく逗留とつりゆうしてみたいと思ひます。奥さんによ
ろしく。頓首。早川俊二。津島修治様。」

「三拾円しか出来ない。いのちがけ、ということを引き
いて心配いたして居りますが、どんなんですか。本当

は二十日ごろまでに、兄より何か、委細いさいのおしらせあるか、と待つて居たのですが。（一行あき。）こうして離れているとお互いの生活に対する認識不足が多いので、いろいろ困難なことにぶつかると思えます。命がけといつので、お送りするわけです。それも私の生活とても決して余裕がないので、サラリイの前がりをして（それも、そんなに多くは前貸はしない、）やるわけです。（一行あき。）勿体もったいぶるわけではないんです。そして、ゼイタクしているわけではありません。教師として、普通人の考えるが如き生活をひたすらしているわけではありません。嘗かつて、君も私も若き血を燃やした

る仕事があつた筈です。（文学ではないぜ。）それをで
す。そのためにです。それに、子供がうまれて以来、
フラウが肺病、私が肺病（勿論軽いヤツ）で、火の車
にちかい。（一行あき。）であるから、三〇で、がまん
してくれ。そして、出来るなら返して呉れ。こつちが
イノチがけになつてしまうから。（一行あき。）文壇ゴ
シップ、小説その他に於ける君の生活態度がどんなも
のかを大体知っている。しかし、私は、それを君のす
べてであるとは信じたくない。（一行あき。）元気を出
せ！いのちがけの……死ぬの……そんな奴がある
か！ 氣質沢猛保。」

「悪習は除去すべきである。本郷区千駄木町五十、吉田潔。」

月日。

「言わなければならぬと思いながら言えない。夏休みになつたら手紙をかこうと決心した。手紙をかき度^たい。かかなければならぬと、思いながらなぜかけないのかということ考えた。『人は人を嘲^{わら}うべきものでない』と言つて呉れても、未だかけなかつた。手紙がぼくを決める。手紙をかく決心がついた。明日から絵を一枚描く。そして一層決心をかためる。一週間で絵が大体

出来る。それから薦つたに行つて手紙をかく。手紙をかか
なかつたら東京へ帰らない。どうなるにしても手紙を
かいてからです。『青い鞭』創刊号うけとりました。
私は実行します。創つたもの何もなく、ただこんな絵
を描こうと思つただけで、貴方に認められようとし、
実行しない自身に焦心していました。船橋から、帰る
日、私への徹底的な絶望と思つて私がかなしんだ、貴
方の言葉は今、特に絶対必要なありがたい力をあたえ
てくれています。ピカソも、マチスも見方によつては
一笑に付されることを実行している。私の、この頃描
いた絵は実行でなく申し訳であつたと思います。ぼく

は長い長い手紙をかきたかったのだ。一分のスキもない手紙など『手紙が仲々出来ない』といたりしたことを千家君は誤解したらしい。手紙をかくと誓った日までは努力した。その日から君にもものを言うに努力はない。一晩中よんでいられるような長い手紙をかこうと思ったのだ。ぼくは、いちぢでない。ぼくは自分をりんごの木の様に重つぽく感ずることがある。他の奴とは口もきき度くない。君にだけならどんなことでも言える。この手紙を信じてくれなかつたら、ぼくは死ぬ。敬四郎拜。」

月日。

「拝啓。突然ぶしつけなお願ひですが、私を先生の弟子にして下さいませんか。私はダス・ゲマイネを読み、いまなお、読んでいます。私は十九歳。京都府立京都第一中学校を昨年卒業し、来年、三高文丙か、早稲田か、大阪薬専かへ行くつもりです。小説家になるつもりで、必死の勉強しています。先生、どうか私を弟子にして下さい。それには、どんな手続きが必要でしょうか。偉大なる靈魂はただ偉大なる靈魂によって発見せられるのみであると、辻潤が言っています。私は、少しポンチを画く才能をもち、文学に対する敏感

さをも、持っています。上品な育ちです。けれども、少しヘンテコです。クリスチャンでもあり、ステイルネリアンでもあるというあわれな男です。どうか御返事を下さい。太宰イズムが、恐ろしい勢で私たちのグルウプにしみ込みました。殆ど喜死しました。さよなら、御返事をお待ちしています。三重県北牟婁郡九鬼港、気仙仁一。追白。私は刺青いれずみをもつて居ります。先生の小説に出て来る模様と同一の図柄にいたしました。背中一ぱいに青い波がゆれて、まっかな薔薇ばらの大輪を、鯖さばに似て喙くちばしの尖った細長い魚が、四匹、花びらにのが胴体をこすりつけて遊んでいます。田舎の刺青師

ゆえ、薔薇の花など手がけたことがない様で、薔薇の大輪、取るに足らぬ猿のお面そつくりで、一時は私も、部屋を薄暗くして寝て、大へんつまらなく思いました。が、仕合せのことには、私よほどの工夫をしなければ、わが背中見ること能あたわず、四季を通じて半袖はんそでのシャツを着るように心がけましたので、少しずつ忘れて、来年は三高文丙へ受験いたします。先生、私は、どうしたらいいでしょう。教えて呉れよ。おれは山田わかを好きです。きつと腕力家と存じます。私の親爺やおふくろは、時折、私を怒らせて、ぴしゃつと頬をなぐられます。けれども、親爺、おふくろ、どちらも弱い

で、私に復讐など思いもよらぬことです。父は、現役の陸軍中佐でございりますが、ちつともふとらず、おかしなことには、いつまで経つても五尺一寸です。痩せ^やてゆくだけなのです。余ほどくやしいのでしよう。私の頭を撫^なでて泣きます。ひよつとしたら、私は、ひどく不仕合せの子なのかも知れぬ。私は平和主義者なので、きのうも十畳の部屋のまんなかに、一人あぐらをかいて坐って、あたりをきよろきよろ見まわしていましたが、部屋の隅がはつきりわかつて、人間、けんかの弱いほど困ることがない。汽船荷一。」

「おくるしみの御様子、みんなみんな、いまのあなた

のお苦しみと、丁度、同じくらしいの苦しみを忍んで生きて居るのです。創作、ここ半年くらいは、発表ひき受ける雑誌ございませぬ。作家の、おそかれ、早かれ、必ず通らなければならぬどん底。これは、ジャアナリストのあいだの黙契もっけいにて、いたしかたございませぬ。

二十円同封。これは、私、とりあえずおたてかえ申して置きますゆえ、気のむいたとき三、四枚の旅日記でも、御寄稿下さい。このお金で五六日の貧しき旅をなさるよう、おすすめ申します。私、ひとり残されても、あなたを信じて居ります。大阪サロン編輯部、高橋安二郎。春田はクビになりました。私が、その様に取り

はからいました。」

「奥さんからの御報告に依れば、お酒も、たばこも止したそうで、お察しいたします。そのかわり、バナナを一日に二十本ずつ、妻楊枝つまようじ、日に三十本は確實、尖端をしゆるの葉のごとくちぢに噛みくだいて、所かまわず吐きちらしてあるいて居られる由、また、さしたる用事もなきに、床より抜け出て、うろついてあるいて、電燈の笠かさに頭をぶつつけ、三つもこわせし由、すべて承り、奥さんの一難去つてまた一難の御嘆息も、さこそと思いますが、太宰ひとりかわるいのじやない。みんながよつてたかつて、もの笑いのたねにしてし

まつて、ぼくは、それについて、二、三人の人物に、殺すともゆるしがたき憤怒ふんぬをおぼえる。太宰、恥じるところなし。顔をあげて歩けよ。クロ。」

「太宰様、その後、とんとごぶさた。文名、日、一日と御隆盛、要いらぬお世辞と言われても、少々くらいの御叱しっせい正には、おどろきませぬ。さきごろは又、『めくら草紙』圧倒的にて、私、『もの思う葦あし』を毎月拝読いたし、厳格の修養の資とさせていだいて居ります。すこしずつ危げなく着々と出世して行くお若い人たちのうしろすがたお見送りたてまつること、この世に生きとし生きて在る者の、もっとも尊き御光を拝する気持

ちで、昨日は、神棚の掃除いたし、この上は、吉田様の御出世御栄達を祈るのみでございます。思えば不思議の御縁でございます。太宰様は、一年間に、原稿用紙三百枚、それも、ただ机のうえにきちんと飾って、かたわらに万年筆、いつお伺いしてみても、原稿用紙いちまいも減った様子が見えず、早川さんと無言で将棋、もしくは昼寝、私にとっては、一番わるいお客でございましたが、それでも、あの辺の作家へお品をどけての帰途は、必ずお寄り申しあげ、お茶のごちそうにあずかり、きつとあらわれるお方と、ひそかにたのしみにして居りました。けっして、人の陰口をきか

ず、よその人の消息をお話申しあげても、つまらなそうにして、私の商売のこののみ、たいへん熱心に御研究でございました。私の目に狂いはなく、きのうも某劇作大家の御面前にて、この自慢話一席ご披露して、大成功でございました。叱られても、いたしかたございません。以後、決して他でお噂うわさ申しませぬゆえ、此のたびに限り、御寛恕かんじよください。とんだところで大失敗いたしました。さて、お言いつけの原稿用紙、今月はじめ五百枚を、おとどけ申しましたばかりのところ、また、五百枚の御註文、一驚つかまつりました。千枚、昨夜お送り申しました。だまって御受納下さいまし。

第一小説集、いまだ出版のはこびにいたりませぬか。出版記念会には、私、鶴亀うたい申し、心のよろこびの万一をお伝えいたしたく、ただし深沼家に於いては、私の鶴亀わめき出ざる様の会には、出席いたさぬゆえ、このぶんでは、出版記念会も、深沼家全員出席の会、ほかに深沼家欠席、鶴亀出現の会、と二つ行わずばなるまいなど、深沼家の取沙汰でございます。尚、このたびは、『英雄文学』にいよいよ創作御執筆の由私の今月はじめの御注進、すこしは、お役に立ちましたことと存じ、以後も、ぬからず御報告申上べく、いつも、年がいなく騒ぎたて、私ひとり合点の不文、わけわか

らずとも、その辺よろしく御判読下さいまし。師走もあと一兩日、商人、尻に火のついた思いでございます。深夜、三時ころなるべし。田所美德。太宰治様。」

「御手紙拝見いたしました。御窮状の程、深く拝察致します。こんな御返事申し上ることが自分でも不愉快だし、殊ことにあなたにどう響くかが分るだけに、一寸書ちよつときしぶっていたのですが、今月は自分でも馬鹿なこと仕出かして大変、困っているのです。従つて到底御用立出来ませんから、悪しからず御了承下さい。これは全く事実の問題です。気持ちの上のかけ引なぞ全くございませぬ。あなたに対する誠意の変らぬことを、

若し出来れば信じて下さい。窓の下、歳の市の売り出しにて、笑いさざめきが、ここまで聞えてまいります。おからだ御大事にねがいます。太宰治様。細野鉄次郎。」

「罰です。女ひとりをして殺してまで作家になりたかったの？ もがきあがいて、作家たる栄光得て、ざまを見ろ、麻薬中毒者という一匹の虫。よもやこうなるとは思わなかったらうね。地獄の女性より。」

月日。

「謹啓。太宰様。おそらく、これは、女性から貴方に

差しあげる最初の手紙と存じます。貴方は、女だから、男は、あなたにやさしくしてやり、けれども、女はあなたを嫉妬して居ります。先日お友達のところ、（私は神楽坂の寄席で、火鉢とお蒲団ふとんを売つてはたらいて居ります。）あなたのお手紙を読んで、たいへん不愉快の思いをいたしました。そのお友達は、ふたいとこといのでしうか、大叔父といのでしうか、たいへんややこしく、それでも、たしかに血のつながりでございます。日本大学の夜学に通つています。電気技師になるとのお話で、もう二年経てば、私はこのお友達のところへお嫁にまいります。夜に大学へ行き、朝

には京王線の新築された小さい停車場の、助役さんの肩書で、べんとう持って出掛けます。この助役さんは貴方へ一週間にいちどずつ、親兄弟にも言わぬ大事のことながらを申し述べて、そうして、四週間に一度ずつ、下女のように、ごみつぽい字で、二、三行かいたお葉書いただき、アルバムのようなものに貼って、来る人、来る人に、たいへんのはしやぎかたで見せて、私は、涙ぐむことさえあります。ときどきは寝てからも読むと見えて、そのアルバムを、蒲団の下にかくして、日曜の朝でございます、私は謙さんを起しに行つて、そうして、そのアルバムを見つ、謙さんは、見つけ

られて、たいへん顔を赤くして、死にものぐるいで私からひったくりました。私はうんと、大声はりあげて泣きました。たいへんつまらないお葉書です。貴方は、読者の目を、もつともつと高く、かわなければいけない。愛読者ですというてお手紙さしあげることが、男として、ご出世まえの男として、必死のことと存じます。作家は人間でないのだから、人間の誠実がわかりません。貴方のアルバムのお葉書、十七枚ございましたが、お約束でもしてあるように、こんどは何々の何月号に何枚かきました。こんどは何々という題で、何百頁の小説集を出します。ほかのこと、言うても判らぬ、

とでもお思いなのですか。謙さんは、小学校のとき、どんなに学問でできたか知っていますか？ また私だって、学業とお針では、ひとに負けたことがございませぬ。これからは、おハガキお断り申します。謙さんが可愛そうでございます。たいてい何か小説発表の五六日まえに、おハガキお書きになるのね。挨拶状五十枚もお出しになったのでございますか？ 私たち寄席のお師匠さんが、新作読むまえに、耳ふさぎと申して、おそばか、すしを廻しますが、すしをごちそうになつてから、新作もの承りますと、不思議なものです。たいへんご立派に聞えます。違うところ、ございませぬ

のね。謙さんは、あなたを尊敬して居るのではございません。そんなにひとり合点がてんなさいましては、とんでもないことになりました。貴方のお小説のどこを、また、どんな言葉で、申して居るか、私は、あんまり謙さんのお心ありがたくて、レコオドに含ませて、あなたへお送りしたく存じます。どんな雑誌にお書きになろうと、他にもファンが、どんなにたくさんおいでになろうと、謙さんには、ちつとも問題でございませぬ。そうして、謙さんは、人間として、どうしてもあなたより上でございますから、あなた御自身でお気のつかないところを、よく細心御注意なされ、そうして、

貴方をかばっています。私たちの二年後の家庭の幸福について少しでもお考え下さいましたならば、貴方様も、以後、謙さんへあんな薄汚いもの寄こさないで下さい。いつでも、私たちの争いのもとです。さいわいにも、あなたに、少しでも人間らしいお心がございましたら、今後、態度をおあらため下さることを確信いたします。ゆめにさえ疑い申しませぬ。明瞭に申しませぬ。私は、貴方も、貴方の小説も、共に好みませぬ。毛虫のついた青葉のしたをぐり抜ける気持ちでございませぬ。一刻も早く、さよなら。太宰治先生、平河多喜。知らないお人へ、こっそり手紙かくこと、きつ

と、生涯にいちどのことでございましょう。帯のあいだにかくした手紙、出したりかくしたりして、立つたまま、たいへん考えました。」

「そんなに金がほしいのかね。けさ、またまた、新聞よろず案内欄で、たしかに君と思われる男の、たしかに私と思われる男へあてた、S O S を発見、おそれいつて居る。おかしなもので、きのうまでは大いにみずみずしい男も、お金のS O S 発してからは、興味さく然目もあてられぬのは、どうしたことであろう。君は、ジウムゲジウムゲ、イモクテネなどの気ちがいの呪文じゅもんの言葉をはたして誦ずしたかどうか。その呪文を述べた

ときに、君は、どのような顔つきをしたか、自ら称して、最高級、最低級の両意識家とやらの君が、百円の金銭のために、小生如き住所も身分も不明のものに、チンチンおあずけをする、そのときの表情を知りたく思うゆえ、このつぎにエッセエを、どこか雑誌へ発表の折に一箇条、他の読者には、わからなくてもよし、ぼく一人のために百言ついやせ。Xであり、Yであり、しかも最も重大なことには、百円、あそんでいるお金の持ち主より。そのおかかえ作家、太宰治へ。太宰治君。誰も知るまいと思つて、あさましいことをやめよ。自重をおすすめします。」

月日。

「太宰さん。私も一、二夜のちには二十五歳。私、二十五歳より小説かいて、三十歳で売れるようになって、それから、家の財産すこしわけてもらって、それから田舎いなかの約束している近眼のひとと結婚します。さきに男の児、それから女の児、それから男、男、男、女。という順序で子供をつくり、四男が風邪かぜのこじれから肺炎おこして、五歳で死んで、それからすっかり老いおこんで、それでも、年に二篇ずつ、しっかりした小説かいて、五十三歳で死にます。私の父も、五十三歳で

死んで、みんなが父をほめていました。ちょうどいい年ごろなのでしょう。まえまえからお話あつた『英雄文学』よりの御註文の小説、完成、雑誌社へお送り申しました由、いまからその作品の期待で、胸がふくれる。きつと傑作でございましょう。」

「前略。小説完成の由。大慶なり。破れるほどの喝采かっさいにて、またもわれら同業者の生活をおびやかす下心と見受けたり。おめでとう。『英雄文学』社のほうへ送った由、もう少し稿料よろしきほうへ送ったらよかつたらうに。でも、まあ、大みそか、お正月、百円くらい損してもいいから、一日もはやく現なま摺みたい心理、

これは、私たちマゲモノ作家も、君たち、純文学者も
変りない様子。よい初春が来るよう。萱野鉄平。」

月日。

「先日、(二十三日)お母上様のお言いつけにより、お
正月用の餅もちと塩引しおびき、一包、キウリ一樽たるお送り申しあげ
ましたところ、御手紙に依れば、キウリ不着の趣き御
手数ながら御地停車場を御調べ申し御返事願上そうろう候、
以上は奥様へ御申伝え下されたく、以下、二三言、私、
明けて二十八年間、十六歳の秋より四十四歳の現在ま
で、津島家出入りの貧しき商人、全く無学の者に候が、

御無礼せんえつ、わきまえつつの苦言、今は延々すべ
きときに非あらずと心得られ候まま、汗顔平伏、お耳につ
らきこと開陳、暫時さんじ、おゆるし被くだされたく下度候。噂よに依れば、
このごろ又々、借錢の悪癖萌え出で、一面識なき名士
などにまで、借錢の御申込、しかも犬の如き哀訴嘆願、
おまけに断絶を食い、てんとして恥じず、借錢どころ
悪い、お約束の如ごとくに他日返却すれば、向うさまへも、
ごめいわくなし、こちらも一命たすかる思い、どこが
わるい、と先日も、それがために奥様へ火鉢投じて、
ガラス戸二枚破損の由、話、半分としても暗涙とどむ
る術ごとございませぬ。貴族院議員、勲二等の御家柄、貴

方がた文学者にとっては何も誇るべき筋みちのものに
無之、これなく古くさきものに相違なしと存じられ候が、お父
上おなくなりのちの天地一人のお母上様を思い、私め
に顔たてさせ然るべしと存じ候。『われひとりを悪者
として勘当かんどう除籍、家郷追放の現在、いよいよわれのみ
をあしざまにののしり、それがために四方八方うまく
治まり居る様子、』などのお言葉、おうらめしく存じあ
げ候。今しばし、お名あがり家とこのうたるのちは、
御兄上様御姉上様、何条もつてあしざまに申しましよ
うや。必ずその様の曲解、御無用にぞんぜられ被存候。先日も、
山木田様へお嫁ぎの菊子姉上様より、しんからのおな

げき承り、私、芝居のようなれども、政岡の大役お引き受け申し、きらいのお方なれば、たとえ御主人筋にても、かほどの世話はごめんにて、私のみならず、菊子姉上様も、貴方のお世話のため、御嫁先の立場も困ることあるべしと存じられ候も、むりしての御奉仕ゆえ、本日かぎりよそからの借銭は必ず必ず思いとどまるよう、万やむを得ぬ場合は、当方へ御申越願度く、でき得る限りの御辛抱ねがいたく、このこと兄上様へ知れると小生の一大事につき、今回の所は小生一時御立替御用立申上候間、此の点お含み置かれるよう願上候。重ねて申しあげ候が、私とて、きらいのお方には、

かれこれうるさく申し上げませぬ、このことお含みの上、御養生、御自愛、願上候。青森県金木町、山形宗太。太宰治先生。末筆ながら、めでたき御越年、祈居候。」

元旦

「謹賀新年。」「献春。」「あけましておめでとう。」「賀正。」「頌春献寿。」「献春。」「冠省。ただいま原稿拝受。何かの間違いでございましょう。当社ではおたのみした記憶これ無く、不取敢とりあえず、別封にて御返送、お受取

願います。『英雄文学』編集部、R。「謹賀新春。」
「賀正。」「頌春。」「謹賀新年。」「謹賀新年。」
「謹賀新年。」「賀春。」「おめでとございます。」
「新年のおよろこび申し納めます。」「賀春。」
「謹賀新年。」「頌春。」
「賀春。」「頌春献寿。」

底本…「太宰治全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年8月30日第1刷発行

親本…「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6
月

入力…柴田卓治

校正…小林繁雄

1999年7月20日公開

2005年10月20日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。